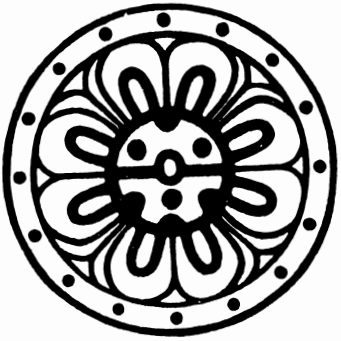
（川口勇書）

会誌名「層富」（そほ・そふ）の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「曽布」「添」とも記され、「倭六県」（やまとのりくのあがた）の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春二月壬辰朔辛亥（20日）の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌の名としました。ご愛顧の程を。　（網干善教）



会　章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

（基本デザイン　朱雀・筧　裕）

第十七号　目次　二〇〇〇年

巻頭言……網干　善教　1
記念講演
飛鳥新出土の亀石……網干　善教　2
埋蔵文化財の調査から……立石　堅志　5
平城ＮＴ　遺跡……柴田　晃良　12
地球の北極点の移動……片桐　一夫　23
短　歌……28
私の歩んだ道（わが半世紀）……北村　孫衛　36
短歌と写真……寺嶋くにお　39
漢　詩……片桐　一夫　40
「ある明治人の日記」より……絵内　正久　41
病気と俳句の人生……牧野　和代　48
俳　句……50
グループからの便り……58
第十七回文化祭記録……97
二〇〇〇年総会記録……102
会　則・役員名簿・組織名簿・会員名簿

巻頭言

新世紀への志向

会長　網　干　善　教

やがて二十世紀も第二千年紀も終ろうとしている。世紀末といえば何だか暗そうな、終末的なイメージがあるが、考えてみれば百年、千年とはいわないが、自分の歩んできた道のりのなかで、これは次の世紀へ、千年紀へ残さなければならないもの、発展させなければ意味のないもの、あるいはこれは前世紀のものとして捨て去ってしまうもの、緒で縛って棚の上にあげてしまうもの、机の引出しや箪笥や下駄箱のなかを開いて整理するような年だと考えれば、なかなか大変、しかも忙しい年だということになる。整理の方法もいろいろある。捨てるもの、置き方を改めるもの、もう少し使い勝手のよいように考えてみることなど、時にはみんなに相談しながら新しい方法を検討してみること、そうすれば気持ちもすっきりするかも知れない。

文化協会も発足して二十年近くになった。新しい世紀を迎えるにあたって、どうしたらよいのかの反省と将来への志向を検討する意見や建説的な提案を期待したい。

総会記念講演要旨

飛鳥新出土の亀形石について

関西大学名誉教授　網干善教

西暦二〇〇〇年という節目の年の正月、古都飛鳥から、体長約二・四メートル、幅約二メートルの大きな亀の形をした石造物とその上に重ねて長さ約一・六メートル、幅約一メートルの石槽状の石造物が出現しました。特に亀形石造物は祥瑞というべきであります。

「亀齢鶴算」という熟語があります。俗諺に「鶴は千年、亀は万年」という長寿を頌える言葉として知られています。また大瑞として慶祝されてきました。すなわち、『延喜式』第二十一、治部省では「神亀」を大瑞五十九種の中に挙げています。

『万葉集』巻一に「藤原宮の役民の作る歌」題する有名な長歌があり、そのなかに「我が国は　常世にならむ　図負へる　くすしき亀も　新た代と　泉の川に持ち越せる……」と詠まれています。めでたい文様を背にした不思議な亀が現れ、新しい（宮の造営の）時代が到来したことを祝福している様相が窺えます。

これと同じようなことが聖武天皇神亀六年にもありました。左京職の大夫であった従三位藤原朝臣麻呂らが泉川で捕獲した一匹の亀を献上しました。その亀の背に「天王貴平知百年」とあり、この祥兆によって神亀六年を改め、亀の背の文字に因んで「天平元年」としたことが『続日本紀』に記されています。

今回出土しました亀形石造物と同じような図形は中宮寺蔵（旧法隆寺蔵）の有名な国宝「天寿国繍帳」の中に表されています。現在この繍帳は断片しか残存していませんが、原形推定は長さ約二・二メートル、幅約三・七メートルの二帳で、文様に百匹の亀が表されていたことが『上宮聖徳法王帝説』によって知ることができます。そして百匹

の亀に四文字づつ、計四百字からなる文章が刺繍されていたことが記録されています。この繍帳は聖徳太子の薨去後、橘夫人が推古天皇の許を得て、登遐された太子が住まわれる天寿国の世界を想定し、多くの女性たちと共に製作されたものと考えられているのです。但しこれには異説もあります。要するにこれらのことは「洛汭の水、霊亀書を負う」を意味しているといえます。

『日本書紀』にはしばしば亀のことが記されていますが、垂仁天皇三十四年条には浦島子の大亀と蓬莱山の説話、天智天皇九年には背に「申」の文字を書いた亀のこと、天武天皇十年には周芳国から赤亀が貢上され、嶋宮の池に放ったとあり、さらに『続日本紀』の平城遷都の詔に「亀筮並び従う」ともあります。

それでは、なぜ亀が吉兆であるのかということであります。古来中国で伝承される「巨亀負山」の説話によって知る如く「天円地方」にかなう形態、すなわち中国古代思想による上は円形のドーム状をなす円、下は水平をなす大地、それを示すのが亀の形であるとしています。「天を支える亀」「天なる神と地なる人間との間の媒介体としての亀」と考えたようであります。中国や朝鮮半島をみると碑の台地として使用されている亀趺があります。最も著名なものは慶州にある新羅二九代武烈王（六五四～六六一）陵や慶州四天王寺の亀趺であります。河内野中寺の塔の心礎にみられる亀の図も強い力で塔を支える亀という意味を持っています。

明日香の地で出土しました石造の亀はどのような意味をもっているのでしょうか。

まず、丘陵上にある酒船石の北側麓に位置し、頭を酒船石の方向に置いてあります。最近の明日香村教育委員会の発掘調査によって酒船石が所在します丘陵は何重もの（現在は四重が確認されている）石垣で囲まれていることが分かってきました。従来考えてきたような酒船石だけの解釈ではなく、丘陵全体を見極めなければならないことになってきました。

中国の漢代に「亀は仙山を背負う」という説話があります。「仙山」とは「不老不死の仙人の住む山」であり、仙境を指します。これは明らかに神仙思想を表しています。亀はその仙山を背負う力強い動物であり、加えて長寿の動物とされてきました。その例は平安時代のものでありますが、東京国立博物館蔵の法隆寺献納御物の「蓬

莱山蒔絵袈裟箱」の裏側の文様にみられます。

そうすると酒船石のある山は、神仙思想を基調とする仙山（例えば蓬莱山もふくめて）に譬えられることになると思います。そこで注目されるのが斉明紀二年是歳条の記述です。

斉明天皇は後飛鳥岡本宮の東の山に両槻宮、天宮と称する観（たかどの）（道観＝道教の寺院）を建てられました。この時、天理市の石上から石を搬んできて積みました。この作業のため、渠をつくるのに三万人、石垣を造るのに七万人、計十万人が動員された大工事であったといわれています。時の人はこれを「狂心渠（たぶれごころ）」と謗（そし）ったともあります。従来はその内容まで十分に検討されていませんでしたが、よく考えてみるとこの大事業は単に趣味の世界の遊びではないと思います。大化の改新の断行という新しい国家の成立と新羅と百済・高句麗の交戦に百済に援軍を送ったという内憂外患の事情を鑑（かんが）み、斉明女帝は宮室の東に神仙思想に基づく両槻宮の建設に着工したと思われます。したがって、これを理解できない当時の人には「狂心渠」の暴挙に見えたかも知れません。

酒船石遺跡の北側山麓で酒船石に向い、水の流れを受けて亀が置かれている意味が分かってきたように思います。酒船石の位置から亀石までの間は谷間というほどの地形ではありませんが、現在も伏流する清水の湧き出る場所を選んでいます。古代にしばしば登場します「天真名井（あめのまない）」が「水の聖なる力は、生命を与える」と考えられてきました。そうすると亀石周辺の敷石や溝、階段状の遺構の存在も注目されましょう。

一つの考え方として、酒船石のあたりから湧く清らかな地下水を石槽を通し、亀の口から入れて背中に溜める。そして尻尾から北の溝に排水する。この亀が背に負った浄水で禊を行う。『万葉集』では「潔身」と書いて「みそぎ」と呼んでいます。

『万葉集』巻四（六二二六）に「八代女王（やしろのおおきみ）、天皇（聖武）に献る歌一首」に、「君により言の繁きを故郷の明日香の川にみそぎしに行く」というのがあります。

神の前に跪き、祈願を行うとき、手を洗い、口を漱ぎ、身を浄める。すなわち潔身です。亀の周囲には一面に敷石があり、濁水を流す縦横の溝や斜面を保護する石の段が設けられています。酒船の亀石はそうした宗教行事の行われた場所であると考えてよいでしょう。

総会記念講演要旨

「最近の奈良市の埋蔵文化財の調査」から

奈良市教育委員会文化財課　立石堅志

奈良市教育委員会が発掘調査を始めてから、今年で二十二年目となります。

二十一年目の節目にあたる昨年、平成十一年には、発掘調査の拠点である奈良市埋蔵文化財調査センターの建物を一新し、更なる調査の進展をめざしています。新しいセンターには展示室、講座室を設け、これまでの調査の成果を常時公開しています。また、調査資料の整理作業の様子がいつでもご覧いただけるようにもなっています。是非とも一度お立ち寄りいただき、私たちの調査の内容を知っていただければと思います。

さて、奈良市教育委員会が行った一番初めの発掘調査は、昭和五十三年に市立若草中学校の校舎建設を機に行った多聞城跡の発掘調査でした。この多聞城は、戦国時代の武将である松永久秀の居城であり、その壮麗さはルイス・フロイスの『日本史』にも記されているほどのものでした。実際の発掘調査では、その壮麗さを明らかにすることはできませんでしたが、その片鱗を窺うことのできる土塁や大きな井戸跡をみることができました。

この調査以後、私たち奈良市教育委員会では、平城京跡の調査をはじめ多くの発掘調査を行い、その成果を公表しています。

奈良時代の都城跡である平城京跡については、現在の奈良市街の大部分に及ぶ大規模な遺跡であることもあって、数多くの調査が行われています。そのなかには学校建設、区画整理事業などの公共事業や民間のマンション建設などの開発にともなっての大規模な発掘調査もあり、これらの調査により当時の都市計画、寺院の様相などとともに、人々の生活の様が次々に明らかになっています。

また、平城京の前後の様々な時代の遺跡についての調査も行っており、その結果、縄文時代から近世に及ぶ様々な時代の様子も明らかになってきました。

今回は、これらの調査成果の中から、史跡平城京朱雀大路跡の調査を中心に最近の四つの調査を簡単にご紹介いたしましょう。

一　史跡平城京朱雀大路跡の調査

平城宮の正面玄関にあたる地区を整備するために、国が行う平城宮朱雀門の復原整備と合わせ、平城京のメインストリートである史跡平城京朱雀大路跡を復原整備することになり、この整備のための資料を得るために、平成六年から平成八年の三年間にわたる継続調査を行いました。すでに昭和六十一年に史跡指定の事前調査として一部の発掘調査を行い、その成果に基づいて仮整備を行っていましたが、今回はその調査成果と合わせて、立体的な復原整備を目指しました。史跡には平城京二条大路から左京三条一坊一坪・二坪に面した朱雀大路跡が指定されています。

その復原整備の様子は、すでに平成十年度から公開していますのでお出かけいただいた方も多いと思いますが、やはり現地で実際にみていただくのが一番だと思います。

これまで平城京の朱雀大路の景観については、平安京の例を引いて考えられていました。それによると都のメインストリートである朱雀大路では、幅七〇mを超える直線道路の両側に大きな土の塀（坊垣築地塀）が、平城京の入口である羅城門から朱雀門まで延々と続いており、特に朱雀門の前面は、国賓が到着した際の祝賀行事や正月の歌垣がおこなわれるため、より壮麗な構造になっていたと考えられていました。また、特殊な例をのぞいては、築地塀に門などを設けて宅地から直接朱雀大路にでることや、大路以外の道路から朱雀大路にでることは禁じられていました。

ところが調査の結果、今まで私たちが考えていた朱雀大路のイメージとは少し異なる様子が明らかになりました。

左京三条一坊二坪に面した位置で検出した築地塀は、基礎の部分での幅が約二・一mで、それから想定される築地塀の高さは五mにもおよぶ非常に大きなものでした。これは平城宮の南面の大垣よりは少し小さいものでしたが、朱雀大路に面した坊垣築地としては充分な規模のも

のだといえます。

しかし一方、朱雀門に面した一等地ともいえる北側の一坪へは、築地塀が続いていませんでした。築地塀は、一・二坪の間にある坪境小路に沿って東に曲がっていたのです。しかも一坪の周囲には、掘立柱塀すらもありませんでした。これは宅地としては非常に特殊な状況でした。さらに、この坪にはもう一つ特徴的な事象がありました。坪の南北の中央位置に、道路幅が九mもの広さの東西方向の道路があったのです。しかも、この道路が朱雀大路と交差する地点では、側溝をわたるための橋が架けられており、朱雀大路へ直接渡ることができたのです。

ところで、坪境小路が朱雀大路と交差する地点では、朱雀大路の側溝を渡ることのできる橋などの施設はなかったこと、また奈良時代の中頃には坪境小路の両側の溝が埋められ、その後ほどなくしてこの道路自体が塀により閉塞されたことがわかりました。また、一・二坪に面した朱雀大路の東側溝及び二坪の宅地内からは、朱雀門直前の位置に関わらず、なぜか大型の貯蔵器である須恵器甕が多く出土しています。これらは、検出した遺構の性格を探る上で重要な手がかりとなりました。

このように、限られた範囲での調査ではありましたが、朱雀大路跡の様子と同時に、一坪及びその周辺が特殊な状況であったことが明らかになりました。そしてそれは、通常知られている宅地の様相とはかけ離れており、何か官庁のような性格を持った場所であることが考えられました。先に紹介しましたように宅地のなかから直接朱雀大路へでることは、官庁や三位以上の貴族の宅地といった特殊な例以外には考えられなかったからです。

そこで、周辺での調査成果と平安京での事例を参考に、この坪の性格を考えてみました。少し簡単に触れておきましょう。平城京左京三条一坊一坪は、西は朱雀大路、北を二条大路に面しています。二条大路に面した地点の調査では今回の調査結果と同じく、一坪の北を区画する築地塀などの施設はなかったことがわかっており、やはり周辺を囲わない広場のような状態であったことが窺えます。

左京三条一坊七坪で行われた奈良国立文化財研究所の調査では、いくつかの小さい建物が整然と並んでいることが確認され、その建物配置が史料に残る平安京大学寮の一部の建物配置ときわめて類似していることが指摘さ

れています。

平安京では、宮外の左京三条一坊の西北部を大学寮としていました。これは平城京では、今回の調査地を含む左京三条一坊一・二・七・八坪にあたります。そこで、平安京の大学寮を示した「大学寮図」（天保十一年（一八四〇）刊行の内藤広前『大内裏図』記載）をみると、一坪の西には、大学寮では唯一朱雀大路に開く「西門」が設けられていたことがわかります。さらに一坪の一部及び二坪は、「厨町」にあたることが示されています。これらは今回の調査で確認された、一坪中央の東西道路と、その道路から朱雀大路へ直接でることのできる橋の遺構、および朱雀大路東側溝および二坪の宅地内から大型貯蔵器が多く出土したことにそれぞれ関連づけることができます。

これらのことから、今回左京三条一坊一坪・二坪で検出した特異な遺構は、平城京大学寮の遺構なのではなかろうかと考えたのです。

ただし、現状では平城京大学寮の想定位置に関しての考証が完全に尽くされたとはいえない状況であり、今後の調査資料の蓄積にその回答は委ねられているといえます。

このような調査成果とその後の検討に基づいて、現在公開されている姿へと復原整備されたのです。

二　史跡大安寺旧境内の調査

大安寺は、南都七大寺の一つに数えられる寺院の一つで、東大寺、西大寺と並び官の大寺として非常に大きな規模を持っていました。寺地は左京の六条と七条の四坊において十五町もの範囲を占めていました。創建時の伽藍の配置は、南大門、中門、金堂、講堂が南北に一列に並び、講堂の北及び東西両側には三面僧房といわれる大規模な僧房がありました。東西の両塔が、南門前の塔院という別の区画の中に建てられる独特の伽藍形式であり、「大安寺式」の伽藍配置と呼ばれています。現在は旧境内全域が国の史跡に指定され、奈良市が管理団体として保存と活用を図っています。

大安寺に関しては『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』という建物の規模や寺の財産などを記した文献が残っていることから、発掘調査の成果を当時の記録と比較することができます。多くの点では一致しているものの、中には調査の成果との違いを確認することができたこともあ

ります。僧侶の住む僧房の一つである北西中房の基壇建物の発見もそうした一例でした。

僧房に関しては、『資財帳』に十三棟の僧房があったことが記されていますが、北西部分の中房に関しての記載はなく、これまではこの部分をのぞいた伽藍復原が考えられていました。ところが、平成九年度の調査で、これまですでに遺構としても確認されていた北東中房とまったく同規模の基壇を発見したのです。この基壇は凝灰岩切石を用いた壇上積という方法の基壇化粧を用いた非常に立派な構造になっていました。さらに、この基壇に北へ続く軒廊といわれる廊下が造られていたことも明らかになりました。この軒廊は北東中房の同じ位置にも造られていたことも、新たに確認されました。しかし、このような構造はこれまで全く知られておらず、どのような性格のものか、また廊下の先にはどのような建物があったかが、非常に興味深い課題として残りました。今、この北西中房及び北東中房は、基壇を復原整備しています。

また、発掘調査が繰り返される中で、大安寺の移り変わりも明らかになりつつあります。新たに建物が造られたり、火事により焼けた建物の再建が行われていたりすることがわかってきました。その際に、基壇の外装を凝灰岩から不要になった瓦を積む瓦積基壇に変えたりすることも行われました。このときに、割れた凝灰岩の破片や礎石の下に敷かれていた河原石なども再利用されています。建て替えの際に必要な材料を集めてくるのは非常に大変であったようです。

大安寺旧境内の北には杉山古墳という大きな前方後円墳がありますが、この古墳の前方部は奈良時代はじめの大安寺の造営時に削り取られています。この斜面を利用して奈良時代の末頃に瓦を焼くための瓦窯が築かれました。瓦窯は平安時代の後半まで操業されていたようです。大安寺に新たな建物を建てたり、あるいは建て替えを行った際に使用する瓦を焼いていたのでしょう。調査の結果、瓦窯は六基あり、南の端の瓦窯は天日で乾かした「日干し煉瓦」を、他の五基は不要になった軒平瓦や平瓦を積み上げて築いていたことがわかりました。そのうちの一基を内部まで発掘調査したところ、ほぼ完全な形で残っていることが明らかになりました。そこで、この窯の形を型取り、実物大に再現して展示することにしました。現在、杉山古墳の周濠部分に覆屋を設けて展示していま

す。杉山古墳の整備も行っていますので、大安寺僧房基壇の復原整備と合わせて、是非ともご覧ください。

三　菅原東遺跡埴輪窯跡群の調査

近鉄西大寺駅の南側で計画が進められている土地区画整理事業の事前調査の中で発見された埴輪窯跡です。菅原町の東側には、平城京の遺跡に重複して古墳時代の集落遺跡が広がっており、この遺跡を菅原東遺跡と呼んでいます。この集落のなかに古墳時代後期（今から一五〇〇年ほど前）に埴輪を焼く窯がつくられました。

菅原という地名は古くからあるのですが、かつてこの地には「土師」と称する一族が住んでいました。彼らは、古墳造りに関わる仕事をしていたと考えられています。のちにこの一族の一部の人々は、地名にちなんで「菅原」と姓を改めていることも知られています。この菅原の地で、古墳に立てる埴輪を焼く窯跡が見つかったことは、こうした歴史を裏付けることになったといえましょう。

見つかった埴輪窯は六基ありました。そのうちの三基は自然の丘陵斜面を利用して、ほかの三基は古墳時代前期に掘り込まれた大きな溝を利用して造られていました。いずれも登り窯と呼ばれる斜面を斜めにくりぬいたトンネル状の窯で、窯の大きさは長さ三〜五m、幅約二mありました。窯の天井部分は、奈良時代になって平城京が造営されるときに削り取られていましたが、窯の内部には赤く焼けた窯の床面と炭の混じった層がサンドイッチのように交互に重なっており、一つの窯が繰り返し使われていたことがわかりました。

この窯で焼かれた埴輪は、古墳に立てるために運び出されているのですが、焼くのに失敗した埴輪が、灰と一緒に窯の周囲に捨てられていました。これらの埴輪片からここで造られていた埴輪の種類や形を知ることもできました。たくさんの円筒埴輪以外に、人、馬、鳥、家、盾、太刀、蓋（きぬがさ：貴人にさしかける傘）、靫（ゆぎ：矢を入れる道具）などをかたどった埴輪が出土しています。

現在この菅原東遺跡埴輪窯跡群は、区画整理事業との関係から移築し、菅原はにわ窯公園として保存、整備されています。発掘した埴輪窯一基と堆積していた灰原の層を屋外展示し、その他の遺構を地上に明示しています。平成十一年度には奈良市の指定文化財に指定し、さらに活用していこうとしています。

四　ベンショ塚古墳の調査

平成二年と少し前のことになりますが、ＪＲ帯解駅の東、山町にあるベンショ塚古墳の調査を、墳丘上にある稲荷社の建て替えに伴って行いました。墳丘の全長七〇ｍの前方後円墳であり、古墳の周りの濠を含めると長さ一〇〇ｍにもなる大型の古墳です。現在でも墳丘の周りの地形からもその濠の範囲がよく見て取れます。古墳の裾には円筒埴輪が立て並べられていました。おそらくは後円部の頂上にも、家や盾や鶏をかたどった埴輪が並んでいたと考えています。限られた範囲での調査でしたが、後円部の頂上には三つの木の棺が納められていたことがわかりました。そのうちのひとつには、装身具（ガラス小玉、針状鉄器）、武器（槍、鏃）、武具（甲、冑、盾）、工具（鑿、斧、砥石）、馬具（鞍、雲珠）が副葬されていました。これらの副葬品から見て、この古墳は五世紀前半ころに造られたものだと考えています。

この地域には、ほかにも五世紀から六世紀の中小の方墳や円墳がいくつかあることが知られていますが、このベンショ塚はその中でも最大規模のもので、おそらくはこの地域を治めていた豪族の墓であったろうと考えます。

なお、出土した遺物は一括して奈良市の指定文化財に指定し、保存処理を行ったうえで、現在、奈良市埋蔵文化財調査センターの展示室にて展示しています。

以上簡単に四つの遺跡調査についてご紹介いたしましたが、これ以外にも、奈良市では数多くの調査を行っています。例えば、今回講演のスライドではご紹介いたしましたが、奈良市柏木町で行った弥生時代の方形周溝墓群の調査、同じく柏木町で行った調査で発見された奈良時代の貨幣「神功開寶」の鋳造関連遺物、さらに中・近世奈良町での数多くの調査などがあります。それらの調査成果はまた機会がありましたなら、改めて紙上でご紹介いたしたいと思います。これらは、はじめにも申し上げた奈良市埋蔵文化財調査センターの展示室等でも、ご覧いただくことができます。また、これからも平城京跡の調査を始め、多くの調査を行ってまいります。機会がございましたらそれらの調査現場にも足をお運びいただき、実際に明らかになっていく遺跡の様子をご覧いただければ、より奈良市の歴史についての実感を持っていただけるかと思います。今後とも奈良市内の遺跡や歴史にいっそう親しんでいただきますよう希望いたします。

平城ニュータウン内の遺跡について

柴田晃良

＝これは、平成一一年一一月五日奈良市北部出張所会議室で話した、「遺跡ガイド・マップ作成報告」の大要です。＝

奈良市教育委員会発行の、「奈良市文化財分布図」の平城ニュータウンの部分を拡大して、それに少し詳しく遺跡名を調べて資料①を作成しました。そして遺跡の概要を資料②にまとめました。

番号を【　】で囲んでいるのは、現在遺跡が残っています。（　）で囲んでいるのは、消滅した遺跡です。

資料①の地図の左端の中程から右の方向へ、西から東へ大きな道路が曲がりながら通っているのが、ならやま大通りです。それから、地図の中央部分を南北に走っているのが、近鉄線です。そして、ならやま大通りの東の端の途切れている所から、右斜め北へ延びているのが、ＪＲの線路です。

資料①の【1】押熊瓦窯は、ならやま大通りを東から西へ下がった所の交差点、押熊北の信号を右折して北へ少し行くと、右側（東側）に神功六丁目緑地公園があります、そこに遺跡が保存されています。然し、遺跡を示す標識もなく、只、六基の窯跡が、少し土盛りをしてその位置が示されているだけですので、資料③に、押熊瓦窯の遺構配置図を載せておきました。資料②の【1】押熊瓦窯の所で、鬼瓦、塼他出土とありますが、これは、4号窯の焚口部の両側壁に各々二枚の鬼瓦たてて、軒丸瓦・平瓦・塼などを組み合わせて構築した、珍しいものであったそうです。

【2】石のカラト古墳は、皆サンはよくご存じのことと思いますが、地図の中央、一寸字が薄いですが、近鉄線高の原駅から西へ、右京団地の南側を上って行って、

右に入った所に、今はＵＨＯの基地の様な形で、キレイに整備して保存されています。私が、昭和四九年（一九七四）に、この古墳を見に行った当時はどの本にも、山田川駅からの道順しか載せていませんでしたので、山田川駅から西へ二ツ目の橋を南へ渡って、現在は桜が丘、兜台、神功の住宅街ですが、その頃は全くの山道で、古墳を探しましたが見当たらず、引き返して近くの農家で「石のカラト古墳は何処ですか」と年配の方に尋ねたところ、「石のカラト古墳？知らんなあ」と言うことで困っていると、奥から「それはカザハヒのことやがな」と若い声がしました。この古墳が奈良県と京都府の境界線上にあるので、今も、京都府遺跡地図には「カザハヒ古墳（石のカラト古墳）」と記載してあります。道を教わりようやく訪ねてみると、石槨の入口はほとんど土に埋まり、古墳の周りには自転車や傘が捨ててあるヒドイ状態でした。現在は内部を見ることができません。資料③の石槨の写真をご参照下さい。

（4）奈良山第５３号窯が、第2団地の東南コーナー付近にありましたが、奈良国立文化財研究所は、ここを山陵瓦窯と呼んでいます。ですから、平城宮跡資料館には、ここから出土した瓦を山陵瓦窯出土の瓦と標示しています。

【１０】歌姫西瓦窯は、平城高校の前の道を東へ上りきって、少し下ると左側に、サンタマリアの建物があり、その東側を北へ入ったところの公園内にあります。説明板もありますが、遺跡は、石を地面に並べて示していますので、草の茂っているときは分かりにくいので、資料③に、歌姫西瓦窯の瓦窯配置図を載せておきました。

この公園の中に小徑が東西についていて、それが奈良県と京都府の境界線で、南側を歌姫史跡公園として奈良市が管理し、北側を音如ヶ谷（おんじょがだに）公園と呼んで木津町が管理しています。

【２０】音如ヶ谷瓦窯は、音如ヶ谷公園内の覆屋の中に、Ⅰ号窯（北）とⅡ号窯（南）が復原されています。またそこには、木津町教育委員会の懇切な説明板や、近在の遺跡を標示したイラスト・マップも掲示してあります。このイラスト・マップには、先程の（4）奈良山第５３号窯は、山陵瓦窯と記載されています。

②相楽山（さがらかやま）銅鐸出土地は、現地説明会の資料には、木津町大字相楽小字相楽山４７番地とあっ

て、現在の地番が分かりません。音如ヶ谷瓦窯のところのイラスト・マップでは、相楽台七丁目のようになっていますので、念のため木津町教育委員会で尋ねると、八丁目から出土したそうです。資料②に書いていますように、実物は、現在、京都府立山城郷土資料館で展示されています。そして木津町教育委員会は、出土地点に標柱をたてる計画です。余談ですが、平成五年に、「銅鐸の世界」と題して神戸市立博物館で特別展がありましたが、私は行けなかったので、後日その図録を送ってもらいました。ところがそれには、相楽山銅鐸ではなくて、木津銅鐸となっていましたので不審に思い正誤表を見ると、相楽山銅鐸と訂正されていましたが、ローマ字標記は、SAGARAYAMAとなっていました。

【14】歌姫瓦窯群跡（国史跡）は、左京五丁目の奈良市清掃工場のところの、二四号線を跨いでいる歩道橋を東へ渡り、降りたところを左へ折れて、勤労者総合福祉センター（サン・アクティブ奈良）の前を通って行くと、フェンスで囲まれた草むら・雑木林があります。そこが国の史跡で、字の消えかかっている説明板がありますが、遺構を示すものは何もありません。

※　平城宮造営に伴う奈良山に点在する瓦窯は、出土した軒瓦から、中山瓦窯、歌姫西瓦窯、山陵瓦窯・押熊瓦窯、音如ヶ谷瓦窯、歌姫瓦窯と変遷したと考えられています。

（15）長谷遺跡は、ＪＲ平城山駅の整備に伴い発掘調査された古墳時代中期（五世紀後半）のかなり大きな規模と推定される集落跡です。竪穴住居跡の床一面に炭が詰まり、土師器の甕などが多数放置されており、集落全体が火災に遭った様子がうかがえます。このあたりは、古代の「平城山越え」「奈良坂越え」のルートといわれており、両側から丘陵が迫った要所固めに配置された集落ではないかとみられています。

（18）佐保山遺跡群は、ＪＲ平城山駅の東に奈良電車区を造成する時に発掘調査されました。奈良時代中期から末期にかかる時期とみられる三八ヵ所をこえる火葬墓が急斜面に不規則につくられていました。位置的にみても、平城京北方にあたり、被葬者は平城京に関係する下級官人ではないかと考えられています。

また、天平一一年（七三九）六月に亡くなった妾を悲しんで、当時二二歳くらいであった大伴家持が詠んだ、

万葉集（四七三）佐保山にたなびく、かすみ見るごとに、妹を思ひで、泣かぬ日は無し。（四七四）昔こそ外（よそ）にも見しか、吾妹子が奥津城と思へば愛（は）しき佐保山。の佐保山の墓地の存在が実証されたと話題になりました。

地図のＡ．Ｂ．Ｃは遺跡ではありませんが興味深いものですので載せました。

Ａの、奈良県・京都府境界標識は、歌姫史跡公園と音如ヶ谷公園の中の遊歩道を東へぬけて、歌姫街道へ出て少し北へ行ったところにたつ大きな標識です。

正面（東）「従是南奈良縣管轄」裏面「大正八年三月建設　奈良縣」北面「従是南大和國」南面「距・・・・・」とあります。

Ｂの、超昇寺橋は、平城高校の正門まえの道路を西へ行くと、近鉄線の上に架かっています。

Ｃの、常福寺橋は、平城高校の南側の道を西へ行くと、同じく近鉄線の上に架かっています。

この二本の橋の名称から、平城ニュータウンのルーツを辿りました。

※　超昇寺跡は、平城宮跡の北方、式内社佐紀神社の東北に位置。超昇寺の開基は、平城天皇皇子の真如親王（高岳親王）。創立年代不詳。

常福寺＝葛木神社　奈良市佐紀町二二四八

葛木神社は字常福寺にあり、その大日堂は常福寺の名残りと伝える。

◎　超昇寺村は寛永一六年（一六三九）から元禄一五年（一七〇二）までの間に全域が、超昇寺村・山陵村・横領（よこりょう）村・門外（もんのそと）村・西畑村（古超昇寺村）・山上村（新超昇寺村）・哥姫村・常福寺村の八ヵ村に分かれました。

◎　明治九年（一八七六）九月一三日に超昇寺村・門外村・古超昇寺村・新超昇寺村・常福寺村の五ヵ村が合併して、佐紀村（現在・佐紀町）となりました。

◎　明治二二年（一八八九）四月一日に押熊村・中山村・哥姫村・山陵村・秋篠村の五ヵ村が合併して平城村となり、昭和二六年（一九五一）三月一五日奈良市に併合されて、押熊町・中山町・歌姫町・山陵町・秋篠町となりました。

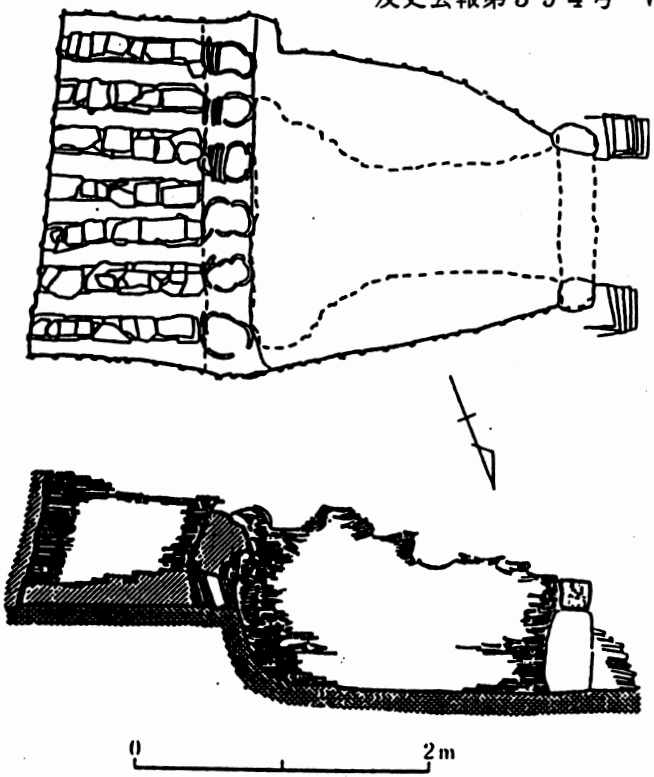
◎　昭和四七年（一九七二）五月二六日平城ニュータウン内の押熊町・山陵町・歌姫町・佐紀町の四町にわた

る地区を通称町名　神功・右京・朱雀・左京と奈良市長が設定し、同年七月一日から実施しました。然し、この通称町名は、歴史の原則を無視した町名であると指摘されていました。通称町名を行政町名とすることに反対する意見があり、神功、右京、朱雀・左京地区自治連合会は、昭和六一年（一九八六）九月二八日奈良市北部出張所会議室において、町名問題シンポジウムを開催しました。そして同年一二月二三日奈良市議会は、通称町名を行政町名とする案を可決して、正式に町名が決定されました。

（以下略）

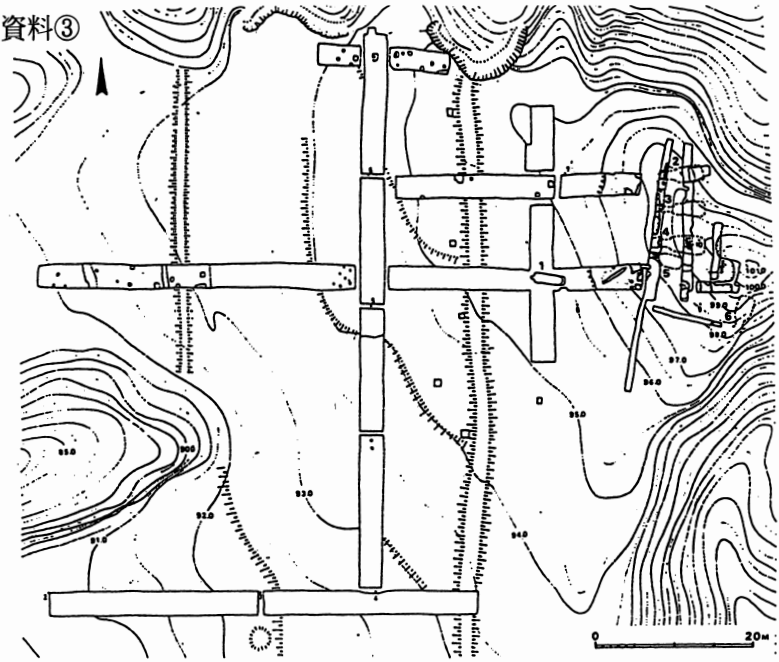
☆印刷の都合上、資料①②③は、少し縮小・変更しました。

友史会報第３９４号　による

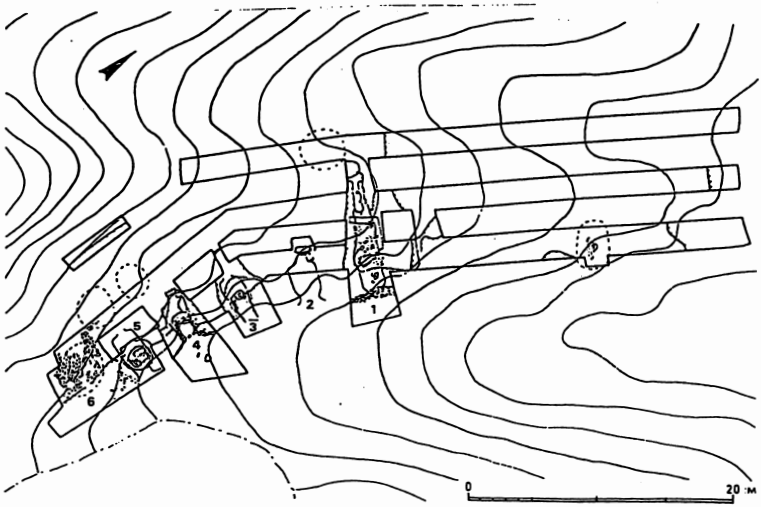


▲ 歌姫瓦窯

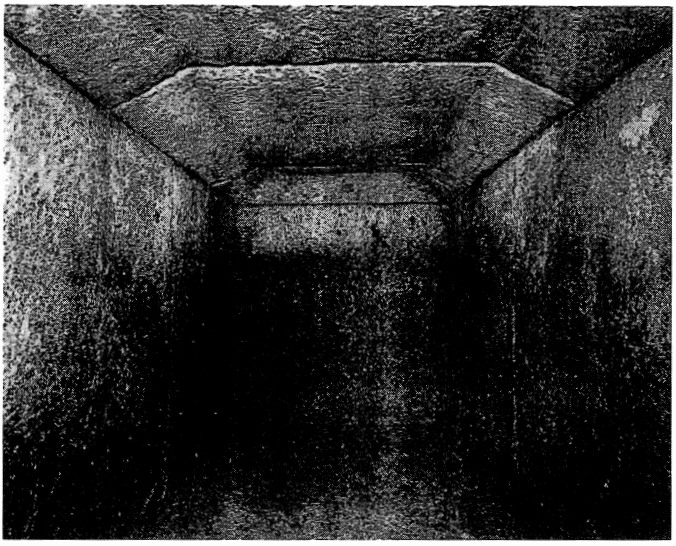
資料③



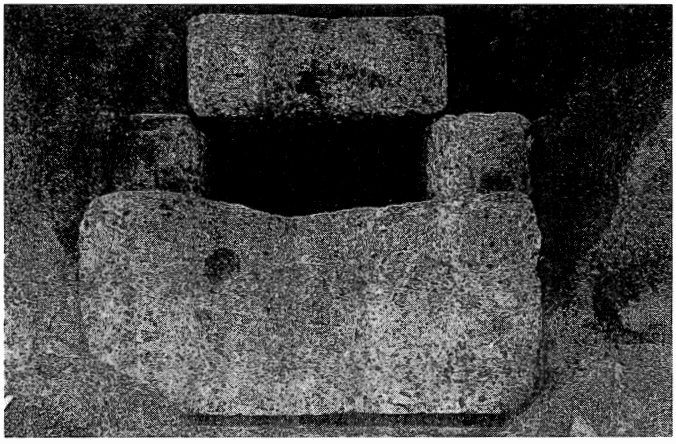
押熊瓦窯　遺構配置図



歌姫西瓦窯　瓦窯配置図



石のカラト古墳



【奈　良　山】　【奈　良　山－Ⅲ】
平城ニュータウン予定地内遺跡
調査概報　　による。

地球の自転軸の移動について

片桐一夫

御承知のように、地球は約26,000年周期の歳差運動により、自転軸（北極点）が公転方向の反対方向に、移動いたしますので其に伴って、春分点も緯度も経度も赤道も其の周期で移動致します。まず緯度の移動について記してみたいと思います。一周期の約26,000年前と申しますと石器時代ですし、半周期の約13,000年前は縄文時代草創期ですが、1,992年の発掘以来有名になった青森市近郊の縄文前期から中期に至る三内丸山遺跡の一周期に亘る其の時代の緯度変化を見たいと思います。まず一周期26,000年とし500年毎に区切って其に対応する三内丸山の緯度を計算してみます。

使用する地図は帝国書院の最新基本地図、世界日本、七訂版の北極地方、縮尺1:40,000,000、ランベルト正積方位図であります。まず地図上に、地球の赤道面と太陽の黄道面との傾斜角度約23.5°の角距離（地図上65mm）の円を黄道面の北極点を中心に描き、半径65mmの北極点移動円を作図します。この北極点移動円を52等分して前述の如く500年毎の各点より青森市までの地図上の距離（mm表示）を求め、次式により其を角距離の度数に換算します。

$$\left(\text{赤道面と黄道面との傾斜角23.5°}\right)\times\left(\frac{\text{地図上の北極点移動円の各点から青森市までの距離(mm)}}{\text{前記傾斜角23.5°の地図上の角距離の65mm}}\right)$$

これは北極点移動円の各点から青森市までの地球上の角距離の度数でありますから、是を赤道以北の緯度で表すには、90°から其の度数を減ずればよいことが分かります。この様にして算出した過去の26,000年前までの三内丸山の緯度は附表のようになります。

この表で緯度が低い程、その時の赤道地帯に近いこと

が分かりますし、三内丸山の盛時の縄文時代の6,000年前頃から5,000年前頃は最も低緯度の亜熱帯に占位出来たので其の頃の三内丸山の女性は、熱帯や亜熱帯の美しい海の貝などの装身具を容易に得られたことと思います。また当時の三内丸山の人々は南地平線近くに南十字星を望見することも出来ましたし、三内丸山より約16°以上南緯度の人々は、逐次頭上高く美しく輝く南十字星や大・小マゼラン星雲を瞻仰することが出来ました。

さて次には歳差運動による春分点移動のことについて記します。地球の赤道面は太陽の黄道面と約23.5°傾斜してゐるばかりでなく、赤道地帯が膨らんでゐるので此の部分が他より大きく太陽や月の引力を受けて、自転軸を引き起こそうとする力をうけますが、地球は自転してゐるので自転軸は北極点移動円を約23.5°の傾斜角を保った儘、約26,000年周期の首振り運動を続け前述の如く逐次地球の自転軸を移動させる歳差運動となり、地球の公転軌道の春分点は角距離で約50.3″／年づつ地球の公転方向の反対方向に移動することになり、この移動が経度の移動になります。

この約50.3″／年の値を歳差（precession）と云い、100年での春分点移動値は約1.4°であり1,000年で約14°であり3,000年も経過すれば春分点移動値は約42°にもなり、牽牛星、織女星のような星座民話は季節と合はなくなって終ふことになります。

また現在ロンドンのグリニッジ天文台の子午線を地球経度の0点として東経、西経夫々180°の経度線を現在の日付変更線として、太平洋上に之を求めてゐますが、この日付変更線の移動設定のことも、将来天文的には懸案になることでせうが、やはり日付変更は広い太平洋を利用してゆくことになるのかも知れません。

また緯度、経度、赤道の移動により逐次これに応化した人類の種々様々な状況に変動が起こるでせうし、動物や植生の移動応化も現れることと思はれます。

最後に附表、附図を見れば、三内丸山が最も高緯度の北緯75.5°にあって寒冷な北極圏気候であったのは、石器時代の19,000年前頃から18,500年前頃の間であり、また最も低緯度の北緯28.5°にあって高温多湿な亜熱帯圏気候であったのは、縄文時代の6,000年前頃から5,000年前頃の間であったことが分かります。

緯度は極地点中心の同心円の大きさで表され地球の北

極点移動により長い歳差運動周期の間に緯度も赤道も約23.5°×2＝47°の変化移動を受けることになり、地球の文化圏は此の緯度赤道の変化移動にも左右されます。

私達が住んでゐる今の近畿地方も歳差運動周期による長い間に亜熱帯圏内から北極圏内の間を約26,000年周期を以て何回も周期的に緯度、赤道が移動してゐたことが理解出来ます。私達の遠い往古の祖先から私達までの間、また私達から遙なる未来の子孫の続く間にも、緯度の移動を受けることがあり、子孫も其の地球の上で未来の生活をしてゆくことでせう。

また歳差運動による春分点移動もあり、是に伴ふ季節移動にも子孫は約26,000年周期を以てやはり何回も是に対応して、地球文化を担ってゆくことでせう。

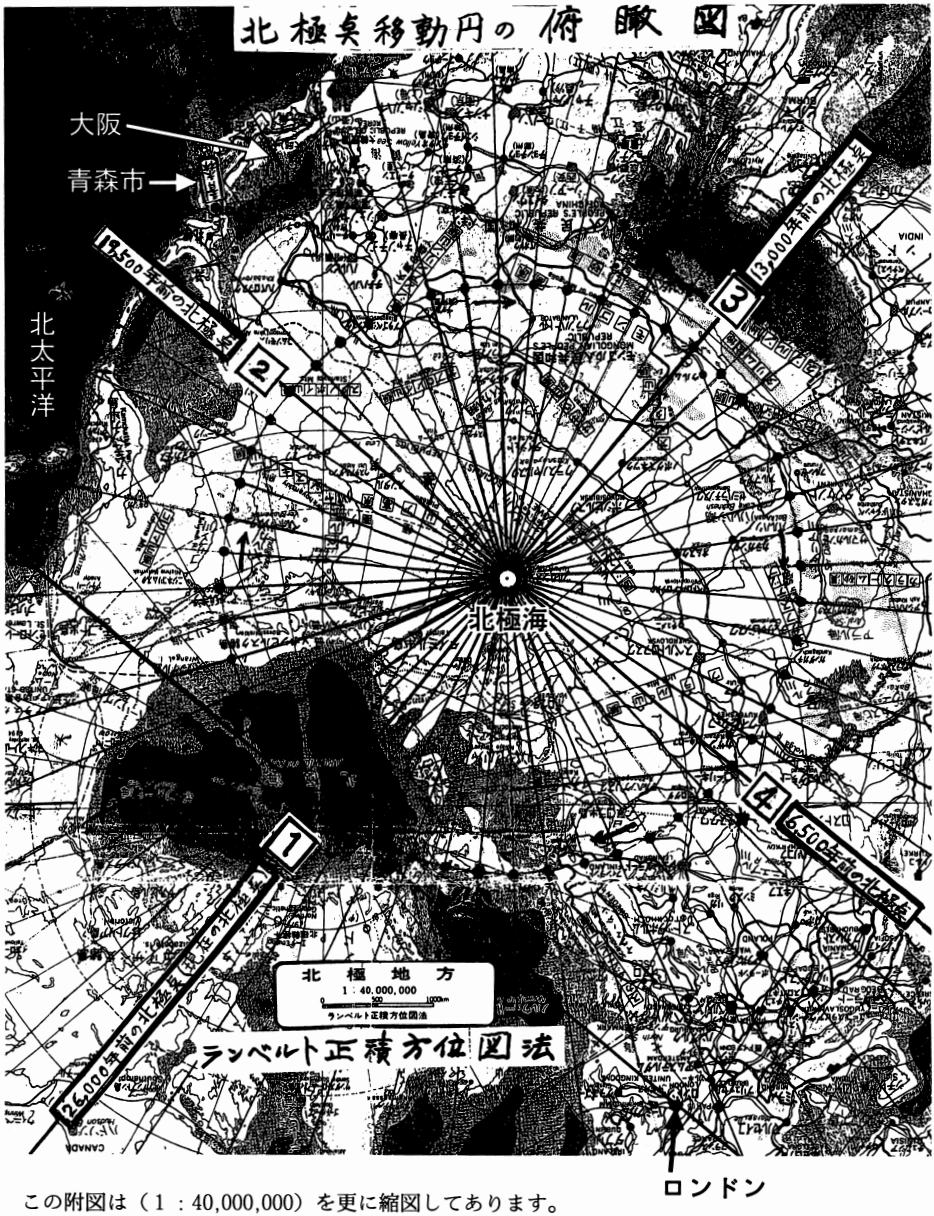
最近、地球の歳差運動による地球文化圏の移動に関連して先史遺跡の研究に天文学が導入されるようなお話を聞きました。この私の紹介してゐる歳差運動の文中には天文学の術語を其の儘、記しましたので少し解りにくかったかと思いましたが、お読み下さるうちにきっとお分り下さったのではないかと思っております。

何れにしましても私達の住んでゐる地球上の森羅万象みな悉く変化移動してゆくのであります。この現象は申すまでもなく地球自転軸の移動によるのであります。

（附表）

三内丸山	歳差運動1周期期間の緯度表						
		現在より	緯度			現在より	緯度
石器時代	1	26,000年前	41.9°	縄文時代	早期	10,000年前	36.3°
		25,500	43.7			9,500	35.0
		25,000	46.6			9,000	33.6
		24,500	49.0			8,500	31.8
		24,000	51.7			8,000	31.1
		23,500	54.2			7,500	30.0
		23,000	57.5			7,000	29.6
		22,500	60.0		4	6,500	28.9
		22,000	62.9			6,000	28.5
		21,500	65.4		前期	5,500	28.5
		21,000	68.1			5,000	28.5
		20,500	70.7		中期	4,500	28.9
		20,000	72.8			4,000	29.6
	2	19,500	74.1		後期	3,500	30.7
		19,000	75.2			3,000	31.4
		18,800	75.5		晩期	2,500	33.2
		18,500	75.2			2,300	33.6
		18,000	74.5	弥生		2,000	34.3
		17,500	73.0			1,800	35.0
		17,000	71.2	古墳		1,500	36.1
		16,500	70.5			1,000	38.0
		16,000	66.1	中世		800	38.7
		15,500	63.1			500	39.7
		15,000	60.7	近世		400	40.1
		14,500	57.8			300	40.5
		14,000	55.1	近代		200	40.8
		13,500	50.6			100	41.4
	3	13,000	49.9	現代1		現在	41.9
縄文時代		12,500	47.0				
		12,000	44.8				
		11,500	42.3				
		11,000	40.1				
		10,500	37.6				
		10,000	36.3				

三内丸山



この附図は（1：40,000,000）を更に縮図してあります。

飛鳥に瑞亀出現を寿ぐ七首

網干善教

長寿なる　大亀いでし　古都飛鳥　平成の御世の　平穏願ふ

大亀は　明日香にありて　現れし　平和な歳の　新たし春

ふる里の　飛鳥に亀の　石ありて　古しえ生きる　姿相みゆ

ふるき世に　飛鳥にありて　埋もれし　潔身の石に　清水湧き出ず

その昔　飛鳥の宮に　亀ありて　明日香風うけ　潔身せしかも

高光る　わが日の本の　万歳なる　くすしき亀の　いでまし飛鳥

酒船の　石の不思議さ　今なほも　誰か知らずや　亀語るかも

寿長生(すない)の郷

荒居智子

人を恋うこともあらざるまま老ゆる尼門跡の雛の小道具
雪割草いま目を開きたるさまを落葉に膝をつき触れみる
手招くに寄りゆく部屋の雛壇は古き京雛の真とすわれり
梁の太く煤めくをやわらかく照らして紙燭幾本のあり
裸木を透かして差せる春はやき光りに覚めぬ寿長生の郷の

春立つ

大浦小枝子

「狂心(たぶれごころ)」と書紀に書く石組かと飛鳥の謎に見入る人人
山頂に酒船石を尋ね来て亀形石との空間を結ぶ
蹲ひの薄き氷を梅が枝に透かして見つむ春待つ蕾
凍て土に淡き蕗の薹の抱かれし夢の記憶に今朝は春立つ
肉体的修行の無益悟りたる出山釈迦のすさまじき像

メンデルスゾーン

岡田越子

君ときていかるがホールにメンデルスゾーン聞きしもどりに土筆をつみぬ
今年こそ趣味を少しは減らさむと思へど大いに勇気のいること
息子一家と夫も来てくれ退院を祝ひて孫が花束くれる
誕生の祝にルーペを嫁にもらふうれしくもあり少し淋しき
「お母さんくもっているよ。このコップ」嫁の前にて息子が云へり

世紀末まで生きありて

片桐一夫

出征の年父より賜いし軍刀の刀緒の色の今に清けし
潔くあれと囁く軍刀の目貫の家紋に父の影顕つ
青春を国の為にと戦いし我ら忘れじ後方の悲惨
後方は安全なりと閣僚たち口揃え欺慢しあれば民は信ぜず
無責任欺慢の風潮の世紀末まで生きありて強く憂える国の行末

飛翔

木庭和子

たまきはる命の響き力強く嘴打ち始むるトキの卵は
国中の空翔びし日も想はする桃花鳥坂桃花鳥田なごりの地名
十一のお顔を仰ぎ祈りつつ哄笑の面に戸迷ひて立つ
さやさやと衣褶れ聞こゆる心地せり須弥壇めぐれる天人飛翔は
にじり寄る老の触手をふりはらひ今日も歌はむラ・ヴィ・アン・ローズ

別離

玉置小代

刻刻と冷たくなりゆく母の手いま鬱血消えて真白になりぬ
亡き母がひとり耐へたる老の日を妹らと語りて通夜の明けゆく
亡き母よ見たまへ柩を運びゐる八人の孫の逞しきさまを
若き日の母の姿をもとめをりセピア色となる便りのなかに
折折に亡母の残しし言葉など記憶に置きて生きてゆきたし

花狂ひ

寺嶋　りくお

旬日を美し大和の国めぐり枝垂よ八重と花狂ひせむ
春風に花の簾のうちなびく妹になびける心にも似て
そよ風に枝垂桜はたをやめの花簪の如く揺れをり
長谷寺の庭の池面の花筏　風に流され行処行くらむ
ひとときを花に狂ひて雨風に気づけば現つ卯月終りぬ

軌跡

中川　都哉子

薄れゆく記憶喚ばむか八月の空にむくげの白き花咲く　（八月十五日）
或るときは優しく生きむとまたの日は毅然たらむとゆれやまぬ老年
何に耐え何を放たむ如月の櫻並木は今日ふぶきおり
一枝のさくら手折りて供うとき亡母も四月もかがよいはじむ
悩み告ぐひとりの少女抱き寄せしダライ・ラマ猊下の大き腕は
（ダライ・ラマ十四世来日）

秋

福井秀子

種埋めし茂木枇杷熟れて初生りの味よく来年を楽しみにする
鉢植の花枯れし上に拳大の仔犬と見れば鮑の顔出す
秋日照る嵐山の公園に手に鳩止まらせ遊ぶ幼ら
常緑樹に混ざりて生えし一本の楓の紅葉青空に明るし
欧州の孫の土産のキーホルダーを落とせしを見つける夫の執念

夫と私

松村せつ子

歳月の流れて愛の言葉なき空気のような「あなたとわたし」
絵に描いたような倖せ求めてた若き日遠く程佳き日日あり
何にしよう夫の好みは承知でもやはり聞いてる夕飼の献立
虎勝てば明日の新聞たのしみと夫と歌うは六甲おろし
争(あらが)うもいつも夫の手のひらで跳てるだけの私は小魚

紫陽花の夕

森田陽子

平城山に粉雪舞う夜の駅の灯に大連港の幻を見き
過ぎゆきは悔多かれどひたすらに藤咲く校庭(にわ)に児らと唱いき
奨学金　許可得られずと中国の女(ひと)語る朝を合歓に雨降る
シャンソンを愛せし友の訃を聞きしメロディ流る紫陽花の夕
かの夏に花を手向けし兵の墓ハバロフスクへ雲流れゆく

紅椿

安田和子

ピアス穴開けたる耳に髪をかけ期末試験に孫は取り組む
友人の朗読おさめしCDに太宰を聞けば心に沁みる
靱(ゆき)背負いあどけなきかなこの埴輪黒い瞳と見つめあいたり
花の器に水流ありて紅椿ひそかに一輪漂いにけり
飛鳥路の野辺を歩めば現世(うつせみ)の時を忘れて小さき蝶追う

夕月

棉源　瑛

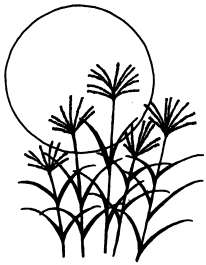
生業（ナリワヒ）の輪島の朝市詠いいし投稿絶えぬ朝日歌壇に

イヤな奴こども心に見つめしかやたら校長に威張りし視学を

五分の四読まれざるまま古本となりしがあわれわが蔵書とす

トップ記事なき日はトップの新聞もスポーツ紙並み見出しのみ大

いつしかに広場に児らの声消えて春日外山に夕月の冴ゆ



わが半生記

北村孫衛

昭和も一桁の遠い昔、さざ波が子守唄の琵琶湖沿いの農村に、四人兄妹の長男として生を受けて、高校卒業までの人間形成期を、豊かな自然と、文化の薫りの中に過ごしたしあわせを、有難く思わずには居られない。

戸外に出れば足下のさざ波、東から北へ霊山、伊吹、三国の山なみ、西にマキノから比良、比叡山と、県境の高峯が遠望出来て、雪をいただいた冬の山々は殊更、神々しいまでに美しく輝いて見える。

日頃の琵琶湖はおだやかでも、厳冬には鉛色の空を伴って、恐ろしいまでに狂い、雪を運んで来るが、湖岸道路を北へ四粁で長浜の市街、南へ六粁で彦根城、東へは一粁強で北陸線坂田駅で、米原駅は南隣で、わが在所にも大勢のポッポ屋さんが、農業と二足のわらじで、常に情報と文化を運んで来たものです。

今も交通の便は良く、名神、北陸自動車道の、米原ジャンクションは米原町との境界にあって、新幹線と共に町の中を突き抜けています。

アメノウオの養殖で知られる醒ヶ井養鱒場を上流に持つ、清流天ノ川は又、鮎の宝庫で、田圃の小川に至るまで、フナ、ナマズ、ドジョウ、エビにボテジャコ（イタセンパラ）など、早苗の季節には、琵琶湖の魚の産卵期となって、田圃はこれら魚達の運動場と化すのが常でした。だから勉強は学校だけで、家事手伝の他は、すべての時間を自然の営みの中に、溶け込んで幼、小年期を過ごしたのです。

国民学校（今の小学校）入学が昭和十六年四月ですが、幼年期は小児喘息の発作で、秋冷の頃から春までは、いくら雪が好きでも、辛い冬となりました。

当時の日常着の絣の着物の思い出と共に、当時の情景は今も鮮明であります。

琵琶湖の小魚のお陰で、身体も三年生になる頃には、すっかり丈夫になりましたが、花を育てることと、料理の楽しさは、物心ついた時からのものであった様に思われます。幼年期に身体が弱かったお陰で、小魚を多く食べて（カルシュームを摂る）丈夫な身体を作れば喘息は治ると聞かされ、又、花には、仏様が宿ると事ある毎に教えられた、躾にあったと思っています。

尾頭付きの魚が大好き人間で、骨まで愛して、と、お皿の上には何も残らないのが、今日の元気の源だと、納得しています。

こうしているうちに、五年生の夏、あの大戦も終戦を迎えました。

世の中は大変な食糧不足でも、米もあり、野菜は、彦根と長浜を控えていて、良質の野菜が生産されていましたから不自由は感じません。唯、出荷出来ない部分、例えば小いもなら、自家分は親いもです。後年、京都のいもぼうに通う様になって、エビいもとの違いはあっても懐かしく思いだされます。

終戦と共に青年団活動も、以前にも増して活発になり盆踊りでは物足りなくて、村芝居へと発展していきます。

長浜祭りには山車の舞台で、子供が歌舞伎を奉納する土地柄ですから、田舎でも芸事には素地があります。

謡曲をうなるのも、いけばなを活けるのも、日常生活のうちで、子役デビューが、前述の謡曲や、お茶、いけばなとの御縁の馴れ初めです。

こうして、大人の世界に足を踏み入れる旁ら、戦後大流行したベースボールを、手縫いのボールに竹のバットで日没まで楽しんだものです。

坂田小学校から、双葉中学に進み、父の親友の農協理事の話に乗って、これからは土木がいいと、高校では土木科、夏休みには農林省にアルバイト、冬は長浜市役所で測量のバイト、農林省が日給二百四十円で市役所が百円、この差額は風邪を引いて熱を出した思い出が今も鮮やかです。

建設省の採用試験で、建設省ではどの様な仕事がしたいかと問われて、山も川も海も好きで土木一生の仕事にしたいと答えて採用になり、紀ノ川熊ノ川開発で、ダム現場配属になったのが奈良県との御縁の始まりです。

五條市を基地に、大塔村、十津川村と、都合十一年、山に溶け込んだ日々でした。

アト、淀川の仕事で枚方市に住んだ時期もありますが御縁があって、上司の本省栄転で西大寺の家を預かることになり、西大寺からこの平城ニュータウンで現在に至っています。

昭和五十年当時は、ニュータウン内も公団が整備中で空地が殆どでした。また雑草のセイダカアワダチソウの繁茂に困っていた時期でもあり、一石二鳥かと、街路樹下花を育てたいと公団にお願いして、右京小学校前バス停の上下を含めて自宅前などに花を育てることとなって、現在に至っています。

趣味のいけばなも昭和五十四年夏、高の原駅に活ける御縁をいただいて現在に至っています。

茶花作りも忙しくて、自宅稽古場、高の原駅は勿論、研究会、お茶会など床の間を飾っています。

五十才で退職してはや十六年。老年の域にさしかかりました。自分でも体力が少し落ちた自覚がありますが、今は座れなくてもお茶を楽しむことが出来る、良い時代になりましたから、修業として茶道、華道でなくて、生きていることを実感出来る、楽しめるお茶いけばなを共有出来たら嬉しいと思っています。

これからも他生の御縁をいただいて、ここ平城ニュータウンがふるさとになる子供達に何かが残せたら望外のよろこびと願ってペンを置きます。

ありがとうございました。

短歌と写真

寺嶋　りくお

最近、短歌と写真の作品づくりの作業が、とてもよく似ていると思っています。

例えば、長谷寺の本堂から満開の桜を見渡し短歌にすれば、緑と甍の中に薄紅の枝垂桜があって、もっと薄い染井吉野があって、とても美しいとしか言いようがありません。しかし、それでは三十一文字に納まりきれませんし、余情もありません。同じように、広角で全体を写しても、絵ハガキ的もしくは説明にしかなりません。

作者が見て美しいと感じた、その感動を読者に伝えるには、美しいと感じた部分をミクロ化し、ミクロ化した部分を拡大することが必要です。染井吉野を子細に見ると、枝の所どころに花が群って咲いていて、舞妓さんの簪のようだとか、枝垂桜が簾のようだとか、池に散った花びらが吹き寄せられて筏のようだとかを、三十一文字にまとめ作品にしなければなりません。いつ、どこで、誰が、なにを、どうして、どうなったか、だけでは短歌としては未熟です。写真も同じように、省略の芸術です。全体からまず、ファインダーの中で余分な所を省き、必要であれば背景や前景をぼかします。そして、プリントした写真からまた余分な所をカットし、焼き付ける時に濃くし、薄くして作者が感動した所だけを強調し、観る人に作者の感動を伝えようとします。

ともに、作者の感動ができるだけ多くの読む人、観る人に正確に伝わらなくてはならないと、私は思っています。解る人だけが解れば良いとか、もうこれで良いと思うことは最も良くないと思っています。

写真はシャッターを押す瞬間に作品の良し悪しの九割がたが決まってしまいます。しかし、短歌は後日にでも作品にすることができますし、作り直したり、推敲することもできます。また、でき上った写真を見ながら短歌を作ることができ、時間的にもとても取り合せが良く、我ながら良い写真が撮れたと思った時は、良い短歌ができるように思います。感動の表現のしかたが異なるだけだと考えています。

漢詩

片桐一夫

詠史（両槻宮遺跡亀形石）

両槻道観鎮丘園
北麓庭陰石甃昏
月映霊亀斎戒水
外征皇子祷天恩

両槻の道観　丘園に鎮り
北麓の庭陰　石甃　昏し
月は映ず　霊亀斎戒の水
外征の皇子　天恩を祷る

詠史（戦国謀略）

高楼欄檻午風軽
酣宴不天時鳥鳴
正是故園愁絶日
反心謀略首丘城

高楼の欄檻　午風軽く
酣宴　不天の　時鳥鳴く
正に是　故園　愁絶の日
反心の　謀略　首丘城

ある明治人の日記より（二）

繪内正久

昨年度の「層富」No.16の前書きと重複するので恐縮だが、日記の主南良吉は明治に生きた人で、大津近辺の大地主の家に住み込みで働く湖東生まれの、名もなき市井の人である。推定年齢二十代後半から四十代あたりの独身男性らしい。日記の文面から主人の代理で小作料の取り決め、取り立て、社寺の代参、土地の名士と臆することなく互角に話し合う。主人の供で旅に出る。

知識欲旺盛で、何にでも興味を示し、首を突っこむ。メモ魔である。文章は流麗、識字力も十分。明治の男はすべて良吉と同様、ひとかどの教育と見識を持っていたのだろうか。そんな半面、主命の帰途に寸暇をつくり小料理屋や色街に立ち寄って、何食わぬ顔で主家に帰ってくる。それを平気で日記にする。それでも主人に信頼され重宝がられて、要領のいい家事使用人である。

さて、今回は明治天皇の「天長節」、第一回帝国議会開院式、明治十年西郷隆盛の西南の役に出兵した地元陸軍歩兵第九連隊の戦死者慰霊祭、同連隊の軍旗祭、安政以来といわれた濃尾地震の被害状況など、彼の手記をとりあげた。お若い方がたには興味の薄い項目ばかりだが、彼の思想の一端を知る参考までにと、お目にかけることとした。次回No.18の露国皇太子刃傷「大津事件」の彼の筆運びがわかるからである。

日記は明治二十三年十月起草で、同月末に教育勅語が発布された。「御真影」が学校に「奉安」され、「一旦緩急義勇公に奉」じる思想と皇室観がすでに定着していた様子が、彼の日記からうかがえる。しかし、発布の日は主家から帰参を許され、母に連れられて主人の訓戒を受けたせいか、発布に関する記述がない。その翌十一月一日が「天長節」である。なお、南良吉のこの日記「記臆簿」は、三十年ほど前京の東寺の弘法市で、古道具屋の

店先の紙くずのなかから拾いだしたもの。用語、用字やかな遣い、句読点は原文のままである。

▽十一月一日　本日天長節ナルニ依り舎弟ト共ニ草津高等小学校ヘ両陛下ノ御肖像ヲ拝觀ニ趣ク　校の周圍ニハ数千ノ紅燈ヲ釣リ正門ニハ花門ヲ設ケ紫縮緬ノ幕ヲ張リ準備周到セザルナシ　玄関ヨリ入レバ理科化学ノ作用ヲ見セ生徒ノ書画及毛糸編物ノ縦覧賣却アリ生花抹茶アリテ拝觀人充満雑踏シ押合々々頗ル盛大ノ冂ニテアリキ　校長藤田義質君ニ會フ　余此擧ノ盛ナルヲ称ス藤田君曰ク舊本校ノ生徒ヲ勸告シ學友会ナルヲ設ケ吾其會長ニ推撰セラル　本日ハ天皇陛下ノ御誕日ナルヲ以テ本會ヨリ此盛擧ヲ爲シタルナリト　歡ヲ尽シ御真影ヲ拝シ帰リ寢ニ就ク　翌日本家ニ立寄リ祖母ト墳墓ニ詣シ別レテ山田ヨリ濠船ニテ大津主家ニ歸リ不品行ヲ深ク謝シ再ヒ主從トナリタルナリ　又実母ハ暫時主人ト談話シ恰モ正午ナリシヲ以テ晝飯ノ饗ニ應シ種々厚情ニ相成リ謝辞ヲ述ヘ午後ニ歸村セラレケリ

▽拾一月二拾九日　帝国議会ノ開院式当日ニシテ我国開闢以来未曽有ノ盛事ナリ

聖上陛下ニハ親シク帝国議事堂ヘ臨御アラセ玉ヒテ式ヲ行ハセ賜フ　聖徳ヲ感拝シ民權ノ長ジタル国家ノ政ニ参與シ百事公論ニ決スヘキヲ祝セズンバ在ルベカラズ

然ルニ大津町ノミハ皇國都鄙ノ別ナク擧テ盛ンニ祝シタルニ反シ、只戸毎ニ日旗ヲ出シ紅提燈ヲ釣リテ僅カニ祝意ヲ表シタルニ止マリ、町会議員官吏諸会社頭取等祝賀ヲ爲シタルヲ聞カズ　余輩不審ニ絶ヘザリキ　聖慮ヲ奉戴シ質素ヲ旨ト爲シタルニ依ル乎　政体ノ代議政治ヲ好マザルヤ政治心ニ乏シキヤ但シハ冷淡ナルヤ知ル能ハズ

▽明治二拾四年壹月十五日　例年之如ク山城国男山八幡神社ノ祭礼ニシテ主家ヨリ余代参ス　午前七時主家ヲ發シ歩行、大谷停車場ニ至ル寒威猛烈ナリ八時七分発列車ニテ山崎停車場ニ着ス　途京都停車場ニテ定刻ヨリ三拾分時遅ル其所以（ユエン）ハ乗客非常ニ多ク以テ八幡社ヘ詣ル人ノ多キヲ知ル　歩行淀川ノ沿岸ニ至ル橋本ヘ舟渉シ裏路八幡山ヲ登リ社祠に参拝ス　時ニ十一時前歸路ニ就ク道ヲ転シ裏路ヲ下レバ八幡町ナリ　参詣人肩摩混雑種々ノ露店両側ニ併列ス歩行十数町ニシテ橋本町ヨリ淀川ヲ渉ル即チ此渡シ場所ハ木津川ノ淀川ヘ落込ミ両大川ノ合スル所土砂ノ本川ヲ填埋スル尤（モット）モ甚シ　故ニ両川トモ町余ニ

沈礁ナルヲ設ケ土砂ノ川中ヘ滞積スルヲ防グ　然レドモ其利害得矢ハ官民意見ヲ異ニシテ頗ル紛騒ヲ釀シタリト

歩行山崎停車場ニテ列車ノ發スル時ヲ待ツ　時ニ降雪甚敷寒威肌ヲ針スルガ如シ　余僥倖ニモ日本酒一瓶ヲ携ェ居タルニ依リ近隣ノ料亭ニ入リ熱暖ナサシメ二三ノ佳肴ヲ命シテ杯ヲ傾ケ甚シク醉ヒ自ラ立ツ能ハズ　漸クニシテ少シク醒ム　恰モ乗車ノ出札時ナリ二時十三分發ノ列車ニ乗ル乗客多ク余等客車中ニ起立セサルヘカラス西京停車場ニテ下車スル人大半ニ過グ三時過ギ大谷停車場ニテ下車挽車ニテ午後四時主家ニ帰ル降雪益々切リナリ

▽貳月二拾三日　山城国宇治郡上醍醐寺ニ参拜ス天氣清爽午前七時歩行大谷停車場ニテ八時七分発滝車ニテ山科停車場ニ下車　歩行シテ小野隨心院ノ前ヲ過ギ下醍醐寺太元明王ニ賽シ女人堂及ビ不動堂ヲ過ギ三拾数町余ニシテ准胝觀世音堂ニ詣シ少シク登リテ五大力童子明王ニ賽ス　堂中ニ大ナル役行者尊二躰在リ　一躰ハ古昔本山ヨリ西国ヘ行キ故アリテ西国ヨリ此所ヘ祀リタル霊尊ナリト又登ル三町余ニシテ開山祖師ノ廟所ニ詣シ酒糟汁ノ施行アルヲ一椀食シ堂傍ノ飲食店ニテ行厨ヲ開キ下山ス

山科停車場発列車ニテ馬場停車場ニ下車急歩稲荷新地貸席今津屋ニ立寄リ紅君ヲ招キ酒杯ヲ傾ケ歡ヲ尽シ臥ニ就キ主家ニ帰リシハ夕ニシテ燈火シアリタリ

▽四月十五日　明治拾年西南ノ役ニ大津衞戍兵戦死者招魂祭十五年忌ヲ十五、拾六、拾七日ニ掛ケ大津御幸山ナル記念碑前ニテ擧行セラレタリ　記念碑前ニハ素屋根の仮屋ヲ建テ三方ニ幕打廻シ祭壇ヲ飾リ諸方ヨリ献供セル供物山ノ如シ　三井寺前通北国町ノ辻ニハ第九聯隊第五中隊作成ノ緑門上ニ招魂祭ト大書シタル花額ヲ掲ゲ同町車路ノ辻ニハ同聯隊第四中隊作の四脚緑門ノ上ニ紗ニテ作リタル大鏡餅ノ燈篭ヲ載セ三井寺前ニハ同聯隊下士官一同寄贈ノ紅白ノ撒餅ヲ積上ゲ御幸山石段下ニ同聯隊第十一中隊寄贈ノ紙製大石灯篭一対ヲ建テ祭場一帯ハ国旗吹貫紅提灯等縦横ニ飾リ立テ遠リ望メバ五色ノ雲ニ包マレタル高山ノ如シ　午前十時式場ニテ陸軍軍楽隊奏楽アリ山階宮殿下大禮服御着用ニテ臨御高嶌第四旅団長岡澤第八旅団長山根第七旅団長其他将校当縣官吏大津営所将校出席シ祭典総監岩崎知事本縣四代議士京都二代議士何レモ礼装ニテ衆目奪フ計リナリ神祭ハ一時間夫レヨリ各佛家諸高徳法會ヲ勤メラレタリ　夜ハ諧楽亭ニテ士官県廳高等官ノ夜会アリ軍楽隊楽ヲ奏シ盛会ナリト　馬場町

デハ太夫ノ道中各花街大ニ繁昌芸妓ハ総テ箱切トナリ料理店ハ魚類大拂底人力車夫ハ非常ノ利ヲ得タリ　第九聯隊長内藤正明中佐ノ祭文左ノ如シ

（前略）是ニ於テ朝廷諸鎮ノ兵ヲ発シ諸路ヲ討ツ賊嶮ニ據リ死守ス其鋒甚ダ鋭シ而我第九聯隊ノ向フ所ハ田原坂口ヨリ余モ又其時ニ歩兵第一聯隊中隊長タルヲ以テ此口ニ向フ田原坂ノ地タル山岳ヲ横断シ一条ノ坂路ヲ通ズルノミ其山脈ハ三ノ嶽ニ出デ延々委蛇トシテ防グニ便攻メルニ難シ賊精鋭ヲ集メ以テ我ヲ防グ（中略）砲声ノ天地ニ轟キ硝烟ノ山野ニ満タザル無シト雖モ其激戦尤モ甚シキハ田原坂ニ如クハ無シ蔚々タル森林モ百打千裂シテ鬼髪束針ノ如ク彈痕攢叢トシテ鋒房蓮巣カト疑ヒ陰雨朧濛悲風怒号シテ驚沙乱蓬此時聯隊長歩兵少佐従六位津田正芳君以下四百八拾六人討死アリ（中略）我軍士ノ忠勇義烈身ヲ犠牲ニ供スル無クシテ今日ノ盛運未ダ期スベカラザルナリ誠ニ思ヘ当今男女琴瑟ヲ鼓スルガ如ク和楽シ人々鼓腹撃壤シテ風魚ノ患無カラシトタル者ハ誰ゾ本日ハ熊本城ニ達シタル日ナリ深ク心ニ銘スヘシ（後略）

▽四月拾六日　午前七時ヨリ記念碑前ニテノ祭事ハ錦織寺住職木邊淳慈南禅寺住職松山舜應萬福寺住職多々良觀輪延暦寺住職三浦實源東福寺住職済門敬沖智恩院住職日埜霊瑞金戒光明寺住職師々吼觀定ノ諸高僧順次ニ法會ヲ執行謹務セラル　参詣見物人ハ一層多カリシ右ニ付馬場停車場ハ諸方ヨリノ發着人多ク大ヒニ雑踏シ十五日ノ如キハ午前十時十三分着ノ列車ガ三拾分遅レ乗客七百余名午後三時五拾分発が四時三拾分トナリ本日モ亦同シ又太湖滋船會社湖南滋船会社湖水丸石場丸何レモ乗客充満到底乗切ラザル程ニテ在リタルト云フ以テ当地ニ集マリタル人ノ多キヲ窺知スベキナリ　餘興ハ甲賀郡有志寄付ニヨル煙火師範学校生徒寄付ノ輕気球西洋手品ヘラヘラ踊八日市寄付ノ大凧横六間堅八間余（註：六間ハ一〇・八メートル、八間ハ一四・四メートルほど、三間ハ五・四メートル、四間ハ七・二メートルほど）二個人夫七拾人モ在リテ引揚タルガ風力弱クシテ飛揚セザリシハ遺憾ナリ　當日第一ノ愛嬌ハ三尾神社拝殿ノ柴屋町藝妓舞妓ノ舞踊ニシテ馴染客ノ見物多ク縁無キ者ハ近傍ヘ寄レズ遠ク攀ヂ木ニ登リテ僅ニ手足ノ動クヲ覗キタルノミ大神宮拝殿ニテ稲荷新地ノ藝妓ノ珈琲ノ接待アリ是亦同様ノ混雑麥酒会社傍ノ六斉念佛踊落語軍談畚卸（フゴ）八幡ノ藪不知狂言等何レモ大入ナリサレド行儀ヨク飾リタル抹茶席書畫揮毫席ハ却テ客無カリ

シ偖寄附金ノ集マリタル額ハ合計壹千四百円餘ニシテ山階久邇宮両陛下ヨリ若干ノ御寄附アリシト云フ　田原坂ノ戦況ハ午後六時ヨリ始マル模擬ノ官軍方百餘名司令官下村中尉之ヲ率ヒテ天神山ニ野營ヲ張リ薩軍方八拾名司令官藤田中尉ニテ不意ニ大谷山ヨリ高觀音山ニ廻リテ襲撃ス吶喊ノ声山壑ニ響キ大砲小砲銃ノ音宛ラ百雷ノ一時ニ落ルガ如ク凄絶云ハンバカリ激戦凡ソ一時間餘ニテ薩軍敗退官軍全勝凱歌ヲ揭ゲル等真物ヲ見ルガ如ク参觀人ヲシテ一層ノ感覺ヲ與ヘシメッタリ此技本日第一ノ壮觀ナリキ余モ轟声ニ驚愕シテ走リ觀覧ニ趣ク其ノ勝敗ヲ別スルヲ得ズ　御幸山山上山下ハ萬燈白晝ヲ欺クハカリ諸興行ハ皆人ノ山ヲ為シ立錐ノ餘地無シ余辛ジテ俄狂言ヘラヘラ踊ヲ見ル煙火ハ絶ヘズ打上ゲ輕気球ハ人家ノ屋根ニ落チ燃上リ雑踏ニ一層ノ混雑ヲ釀加ス

▽四月拾七日　早朝ヨリノ好天且ツ最終日ナルヲ以テ来集人多ク三井寺山上山麓共ニ充満シ人頭恰モ饅頭菊ノ如ク混雑シタリ　法會ハ智恩寺教王護国寺本国寺本派本願寺佛光寺石山寺各宗高僧参拜アリテ午後三時ニ終リ夫レヨリ碑前ニ於テ上柴屋町藝舞妓ノ手踊ヲ催シ其後餅菓子密柑ヲ撒散シタリ予ハ麥酒會社傍ノ六斉念佛踊及ヘラヘラ踊三尾神社ニテ上柴屋町藝妓ノ手踊ヲ觀望シ午後四時練兵場ニ行キ豚追ヲ見ル豚一頭ヲ放チ捕ヘテ連レ歸リ来ル者ニ賞與トシテ手拭一筋ヲ贈ル趣向ナリシガ捕エタル者ハ兵卒ノミナリシガ為士官が兵ノ捕獲ヲ禁ジタルニヨリ其後ハ諸人入リ乱レ三頭ノ大豚争イテ捕ヘタルニゾ其他練兵場ニテ兵士ト巡査ノ銃ト剣ノ撃突アリ是又珍ラシカリシヲ以テ見物人多カリキ更ニ俄狂言西洋手品輕業ヲ觀八幡ノ藪不知ニ入ル出ルヲ知ラズ垣ヲ踰ヘテ出ツ　本日ハ三日間中好天ナリシヲ以テ人出殊ニ多ク露店数算ナシ流石偉觀盛式ヲ極メタル招魂祭モ是ニテ全ク千秋樂ヲ告グルニ至ル寔ニ未曽有ノ賑ニシテ泉下ノ士モ嬉シ涙ニ咽ブナルベシ且ツ三日間當地ニ来集宿泊人ハ毎日千三百人宛アリテ平常ノ十倍ナリ又花街遊客ノ遣金ハ毎日合計五百圓餘ニテ是又平常ノ三倍ナリ且掏摸ハ五名拘引セラレタリ　午後六時主家ニ歸ル

▽拾月二十八日　午前六時四拾五分俄然激震アリ一同周章狼狽シテ大道ヘ走リ出ヅ二分時間余ニシテ止ム主家庭前ノ石燈籠二個顚倒シ壁等ノ崩落シタル箇所多シ又縣廳ノ知事官房及收税部の天井横壁ニヒビ割レ仕切り練瓦破壊セシ箇所アリ四ノ宮天孫神社ノ鳥居ハ少シク一方ヘイ

ザリ甚ダ危險ナリ其他土塀ヲ倒シ壁ヲ落シ又手洗鉢ノ水流レ棚上ノ物品轉落シタル數知レズ其後終日時々震動アリテ人心恐々トシテ薄氷ヲ踏ムノ思ヲナシ其夜皆警戒セリ　東海道鐵道線ノ荷物列車米原彦根間ニテ脱線シ其後ハ滬車不通トナレリ京都大坂モ烈震ニテ工場ノ煙筒石燈籠ノ顚倒シ屋根塗家壁等ノ破損數知レズ　彦根ハ震動時間八分間ニシテ倒家三十余戸負傷者多ク壓死者五名アリ尚其後モ小震絶ヘズ又舊藩主井伊伯爵ヨリ救済金若干圓賜ハル

▽十月二十九日　二三回ノ微震アリ其夜町役場ヨリ諭達アリテ町家警戒ヲ嚴重ニシタリ二回ノ強震アリ擧ッテ大道ニ飛出デタリ　又今回ノ大地震ハ安政大震以来熊本地方ニアリタルノミニシテ当地方ハ老父ノ談ニ止マルノミナリシニ此朝ノ如キ劇震アルニ遇ヒ人々周章狼狽一方ナラザリキ　大強震ノ中心ハ岐阜縣下根尾谷ニシテ一里方陷落スルコト拾数間ナリシト聞ク故ニ岐阜愛知両縣下ハ実ニ非常ノ震災ニシテ其惨状ハ誠ニ云フニ忍ビザリシト聞クガ其態状ハ遙カニ豫想外ニシテ拾余万ノ家屋ヲ一瞬時間ニ破損シ甚ダシキハ不幸ニモ一家擧テ盡ク壓死サレタル者少ナカラズ又僅カニ身ヲ脱シテ逃レ得タル者モ皆多クハ肉ヲ傷ツケ骨ヲ挫キ又ハ身体各部ニ多少ノ傷痍ヲ被リ其上火災ノ各所ニ起リ家屋財産ハ皆焼失シ倒レタル柱梁ノ間ニ挟マリテ僅ニ生命ヲ保チ得タル者モ皆之ガタタニ焼死ノ不幸ニ遇ヒタリ親子兄弟夫婦幾万トナク相共ニ離散シテ悲哀叫號ノ有様実ニ惨状極マレルガ故ニ各地堤防ノ破壊モ亦非常ニシテ万一ノ大雨アラバ真ニ如何ナスベキカトノ歎声諸処ニ喧シク人心皆洶々トシテ爲ス處ヲ知ラザルノ状態筆紙ノ能ク盡クス処ニ非ズ　其後ノ調査ニ依レバ両縣下ニテ死傷者其数貳万五千貳百四十八人現ニ岐阜市ノ如キハ毎日焚出シノ救助ヲ受クル者大凡一万四千人大垣町ニテモ亦大凡一万三千人家屋ノ全部ヲ破壊シ或ハ焼失シ又其一部ノ破損ニ係ワル者十一万九千二十六戸外ニ埋没又ハ焼失シタル家具其他ノ財産ヲ算入スレバ全ク損失トナリタルモノハ蓋シ莫大ノモノナリ故ニ全國ハ勿論外国ニテモ慈善者ハコゾリテ義捐金ヲ爲シ其金額数万円ヲ超過シタリ　畏レ多クモ天皇陛下皇太后陛下皇后陛下ヨリ特ニ一万数千圓宛ヲ下賜アラセラル　又政府ヨリハ國庫剰餘ノ金ヨリ岐阜縣ヘ貳百余万圓愛知縣ヘ百余万圓ヲ震災救助及ビ河川堤防工事費トシテ天皇ノ裁下ヲ経テ臨時支出ヲ爲シタリ　又大坂ハ震動時間八分

倒家五十余戸負傷者モ多ク就中大坂紡績会社浪華紡績会社ハ工場煉瓦一震ノ下ニ轟然トシテ屋根落チ壁陷落セシ爲場内ニ在リテ働キ居タル職工ノ内梁ノ下敷トナリ煉瓦石ニテ打タレ死者三十余名負傷者百余名アリト云フ其他ノ工場烟突等ノ傾倒シタル又ハ屋根等ノ破損シタル数知レズトイフ。

追記　劇震七百二十方里、強弱方里万五千　濃尾劇中ノ劇惨状聞得テ暈眩セントス　根尾谷忽然ト陥落、寺院ノ屋根川ヨリ低シ　山崖崩レ地盤裂ケ家屋倒レ炎煙ヲ漲ラス　逃ル者モ死居ル者モ死道路破レ泥泉ヲ噴ク　走ル者傷ツキ轉ブ者モ傷ツク　堤防壊レ梁棟壓レ腰ヲ壓シ頭ヲ椽抑レ肩ヲ叫喚ノ中火災幾條焦熱地獄ノ裡憐ムベシ　万余ノ負傷八千ノ死死屍阜ヲナス死臭遠ク傳フ　貴賤別ナク災害ニ罹リ甚ダシキハ一家擧ゲテ絶滅市街原野ニ變ジ震動日ヲ経テ尚止マズ　聖慮不安鳳眉ヲ頻卑ム　松方首相侍從愛岐ニ到ル親王又懇ニ災地ヲ巡ル　恩賜直ニ救目下急　更ニ勅令ヲ出シ脩堤防　義捐ヲ募リ集ル二十餘万圓凍飢ヲ救フ

▽十二月十八日　當町衛戍歩兵第九聯隊ハ軍旗記念祭ヲ執行セリ其光景ハ同衛戍前ナル練兵場ニ於テ午前八時三十分ヨリ分列式ヲ行ヒ第四師團ヨリ師團長黒川中将大田旅團長大越知事大津地方裁判所長判事検事龍岡警部長各郡長師範学校商業校大津高等小學校職員生徒高等官家族等列席ス黒川師團長口頭ニテ祝詞聯隊長内藤中佐軍旗授與式ニ於テ賜フ所ノ勅語ヲ左ノ如ク敬読シ奉ル

勅語　歩兵第九聯隊編制ナルヲ告グ仍テ今軍旗一旒ヲ授ク　汝等我軍人等協力同心シテ益威武ヲ発揚シ國家ヲ保護セヨ

大坂ヨリ来リシ軍樂隊分列行進曲ヲ奏シテ終リ来賓一同ハ営内ヲ縦覧シテ退散セリ　餘興ニハ練兵場ニテ競馬出入り商人ノ角力煙火アリ営内デハ一中隊ガ西南役隈川ノ戦況二中隊ハ辨慶ノ吊鐘引キノ人形四中隊ハ素戔嗚尊大蛇退治ノ像六中隊ハ橋辨慶五中隊ハ達磨ノ像七中隊ハ二見浦八中隊ハ児島高徳九中隊ハ富士ノ巻狩十中隊ハ那須与市扇ヲ射ル十一中隊ハ小野道風蛙ヲ見ル十二中隊ハ赤十字社員負傷兵手當ノ衛戍病院ノ様子　午後六時ヨリ衛戍官集會所ニテ祝宴ヲ開ケリ宴酔ノ余リ紛議ヲ生ジ遂ニ腕力沙汰トナリタルモ先ツ無事ニ済ミタリト　町中ハ各戸國旗紅燈ヲ吊ルシ廣大ナル営内及練兵場ハ觀衆露店ニテ充満シ在リタリ

病氣と俳句の人生

牧野和代

昨年度は坂本よしゑさんの御逝去、今年度は、ならや ま句会の大黒柱牧野春駒の遷化という悲しくも淋しい年でございます。二十三才からの片肺というハンディを持ち、昭和六十一年の再発から十四年間入退院をくり返し乍らも、佛のお加護をいただき強い精神力と俳句への情熱によってここまで生きてこられたのだと思います。十六才から作句を始め、まさに「病気と俳句の人生」だったといえましょう。

「ホトトギス」「青」「晨」の同人、伝統俳句協会評議員として俳道に活躍して参りました。晩年の脳梗塞の時も俳句を作り続ける姿に医者も驚嘆致しました。と同時に、俳句の偉大な力を思わされたことでした。

黄泉の国より戻りきて明易き
手術の灯春めく色と思ひ浴ぶ

は、沢山の結社にテレビにホームページにと、極楽の文学、癒しの句として採り上げていただきました。

今生の浅茅ヶ原の露に触れ
松手入梯子を離(さか)ることながし

の辞世の句を残し、自ら黄泉の国の門を叩いて、いい寝顔を残して逝ってしまいました。

生前故人が賜りました皆様の御芳情に有難く厚く紙面をお借りして御礼申上げます。

合掌

弔句

散ることの早さを惜しむ冬桜　伊藤　柳紅
無情なり散りても紅き冬紅葉　上田　善次
小春日や師に句学びし日々想ふ　江崎　陽子
明暗を分ちて銀杏散り敷きぬ　大浦小枝子
黄泉へ発つ師の温顔や紅葉散る　岡　良子
城濠の夜も松みどり浮寝鳥　尾川　豊香

冬晴や遺徳をしのび香流る　柏木　一枝
合掌す師の優しさに星冴ゆる　喜多　まさ
紅葉且散る粛々と蕭条と　木村　長子
師と仰ぎし日の短かさよ寒椿　小久保孝子
背蒲團とれしよろこび聞きゐしに　込山　山歩
師逝かれ色なき風をまとひけり　周藤　智子
石蕗あふれ涙あふれぬ師を偲び　曽根千鶴子
二千年目前の別れ師走入る　多田　文子
爽波師と俳句談義や冬の月　辻田しま代
失ひしものの大きく枯野かな　南村　昭栄
短冊の形見となりし寒さかな　西田たまみ
吟行は宇宙の彼方時雨くる　西山佐代子
訃を聞きてこころ千々なり冬菫　藤井よし治
冬籠りなされてゐるとおもふほか　藤澤　陽子
亡骸と別るる落葉踏み分けて　堀池　敏子
冬の虹黄泉よりまたも戻り給へ　溝口　清子
予期せざる恩師の訃報菊の露　三井サチ子
冬日和師弟に短かすぎにけり　美保　義市
冬帝も守り給はむ師の天路　村上　俊子
巨星墜つ凍夜に逝きし師を偲ぶ　森田　陽子

ゆく秋や道に灯りを賜はりし　和田美代子
忽然と冬の銀河へ駒駆けり　牧野　和代
冬晴やいま呼吸易く花園に　〃

二千年二月二十二日、芦屋にオープン致しました虚子記念文学館に二十二才で虚子選のホトトギス巻頭をいただきました句

夏潮に海女はみどりとなり沈む

が陶板に焼付け展示されております。芦屋の方にお出掛けの節は、お立寄下さいますように。

現在、会員は自由題に席題にと脳のアンテナを自由自在に伸ばし句作（苦作）に努力しております。

春駒の教へを心に和気藹藹の句座をもっております。是非一度ならやま句会をのぞきに御出まし下さいませ。お待ち申しております。

俳句

桜炭

故牧野春駒

竿秤ぴんとつりある鵙日和

方丈に一切見えて秋収

北風に干す順々に蛸大き

残りたるいのち浮寝とともにあり

一休がこのごろ好きに冬支度

菌まで十歩を歩み息切れす

注連焚いて色即是空説かむとす

院号を持つももたぬも霜の墓

禰宜逝くや俵に残る桜炭

貝ボタン作りて末枯を白く

なずな打つ

牧野和代

忌ごもりの一人の昼の餅焦がす
ぼんやりと寒鯉の緋も喪の人も
柚子風呂に沈もる寡婦の思ひ濃く
たとふれば冬の泥田に溺るごと
法華寺の枯木に泣きに来るのみ
みな去んで喪の堂といふ寒さかな
さみしくて手足の冷えて早梅に
焦げ付きを擦りこするも寒の寡婦
寺を継ぐ心決まりて打つなずな
松過ぎて忌明けて掃除嫌ひかな

サングラス

伊藤柳紅

淡雪のひっかかりたる楓の芽
散ってゐる花の向ふに雨の降る
鉾建の縄にも打ちし清め塩
手術したばかりの眼なりサングラス
水浴びに浅茅ヶ原の小鳥来る

色即是空

上田善次

盆梅の姿態艶なる古木かな
空青く燃えるつゝじの蕊(しべ)甘し
咲きつぎて肌なめらかな百日紅
その揺らぎ一寸高く秋桜
咲きそびれ紅色哀し寒椿

天高し

岡良子

砂漠来し砂のこぼるる髪洗ふ
清掃日靴の紐にも草じらみ
思ひ切りボール打ち上ぐ天高し
ひと粒の薬に犬の咳とまる
黄泉へ発つ師の温顔や紅葉散る

時鳥

柏木一枝

物事の進まぬままに花は葉に
濡れし足縁に伸して緑立つ
満ちたりし道後元湯の花夕
墓詣りのこりて告ぐることあまた
お地蔵に草花たむけ時鳥

五月雨

喜多まさ

墓掃除すめば安らぐ梅日和
山茶花の風なき時も散り急ぐ
花の下歩ける事に感謝して
障子開け沈丁の香の迫りきし
五月雨にふと口ずさむ愛唱歌

松過ぎ

木村長子

白萩の咲き染め候ゆれ候
泣けとばかり空は高くていわし雲
シクラメンほどの哀しみ街に満つ
松過ぎの仁王の目玉に刺されけり
雪降るや石狩挽歌きく夜は

駒繋ぎ

辻山山歩

春寒や小さく埋まる去来の碑
五月雨や胴間聲あぐ渡舟守り
遠ざかる青春徹の登山靴
おしのびの舟の出入りや芦の花
立冬の塀に残りし駒繋ぎ

春浅き

周藤智子

枯芝を割って草芽がのぞきゐる
畠枯れや地に潜むもの春陽あぶ
春あさき母を託して兄逝けり
明日雨といふ紫陽花の色の濃し
こわれ鉢覚えなき芽が萩になり

宮詣り

多田文子

老へばとて女なりけん初化粧
立春や二人の子の父誕生日
梅見して客膳の座の一日かな
バッチャンの声玄関に孫帰省
小春日や二祖母で嬰抱く宮詣り

哲学の道

南村照栄

緑蔭に病の話死の話
哲学の道は細くて花あやめ
湖北路の菩薩伏目に半夏生
台風の来るてふ空の青さかな
み仏の思惟の指先秋深し

神農さん

辻田しま代

鱚釣らむ舟漕ぎ出でし吾十五
庭祠かくれるばかり七変化
くじ運の悪きを嘆き温め酒
神農の虎に予後の身預けなん
杖曳いて来て萩も焚く菊も焚く

野遊び

西田たまみ

野遊びに満ちたる顔と乗り合はす
不精ひげ生やし秋刀魚を商ひぬ
草むらにはみ出すほどに虫の鳴く
初詣最も神に近づきぬ
薄氷や抱く児の重み温みあり

雪催

西山　佐代子

除夜の鐘鳴り初めにけり厨事
薄墨の筆ととのへし雪催
花筒にたっぷりそそぐ寒の水
貝寄風の屋根うっすらと花粉置く
古の神宿りたる山朧

九州に旅して

藤井　よし治

高千穂の秘峡の雉(きじ)を聞きにけり
春陰や峠に佇ちて寝釈迦見る
風光る球磨川下り客多し
春雨や裾のみ見せし櫻島
なべ鶴の群がる畑に雨寒く

夜の秋

藤澤　陽子

手になじみきたる束子や夜の秋
吹く風と吹かるるものと暮の秋
黄砂ふるかの大河からかもしれぬ
立つ脚の細きがかなし孕鹿
屠蘇に酔ひ躾ぬちに脈のありにけり

水の香

堀池　敏子

花薺足に優しき土の道
水の香のして鮎釣の人通る
飯食まぬ人に西瓜を吸はせけり
爽やかに前行く人の手に葉書
鶺鴒のひと飛びしては砂に鳴く

孫

三井幸子

花まつり散華一枚幼子に
日向ぼこ子守をしつつ立話
一人旅孫の苞なる板若布
ランドセル肩に馴染まず葱坊主
春着の子撮り度しと言ふ留学生

二千年

森田陽子

小豆粥夫婦で迎ふ二千年
雪の富士外人墓地にのぞみたり
ペルーより娘の帰り来て蜆汁
新妻の花かんざしや燕交ふ
明易し雲の上なる出で湯かな

樟若葉

村上俊子

樟若葉雲水の頭の真青なる
飛機の灯が花火の隙をよぎりけり
法被着しはもと總理なり草もみぢ
うとき耳の底に受け止め夜の時雨
線香の匂ひの彼岸団子かな

積木

山内梅乃

万一の六甲の水年用意
寒風や迷ひし犬の名をさけぶ
雪の中孫のぬくもり手につたふ
孫と夫積木遊びや年用意
梅便り庭の苔のまだ硬し

歳月

和田　美代子

吹奏の余韻の流れ春立ちぬ

雨の日は雨に艶めく芽木の彩

観音の御手美しき春日影

夏椿心ひかるる白さかな

二万九千生きし歳月お茶の花

グループからの便り

歴史教養講座

三宅美恵子

歴史教養講座に参加して

三十年も昔のことでしょうか、武蔵野市に住んでいた頃、関西方面への万葉旅行の途中で、高松塚古墳発掘のニュースを知りました。びっくりしたり興奮したりで、急遽予定を変更して、是非発掘の様子を見たいということになり、泥んこのみかん畑を通り発掘現場へ向かいました。この時が網干先生にお目にかかった最初で、若い網干先生と、私達の講師だった松井先生が話していらっしゃる古い写真があります。新聞報道から四日目位でした。その頃「奈良患ひ」という言葉を知りました。「関東に住んでいると、時々むしょうに奈良や大和へ行きたくなる病気なの」と友人は笑っていましたが、その言葉は今も心に残っています。

憧れの奈良に移り住み、歴史教養講座に参加させていただくようになって四年余りになりますが、今日はどんなことを教えて下さるかと毎月が楽しみです。

『日本書紀』講読が基本なのですが、系図を見ながら、文章に隠された歴史の背景を判り易く面白く話して下さるので、すっかり歴史好きになって、たちまち二時間が過ぎ去ってしまいます。

最近は発掘のニュースも多く、富本銭、大和高田の池田古墳から出土した美豆良に結った埴輪、飛鳥京跡の苑池、亀型石造物、ホケノ山古墳など、その都度判り易く説明して下さり、新聞記事をコピーして下さって、記事の読み方や、考古学者と新聞記者との考え方の違い、立場や書き方等を伺ってなるほどと感心ばかりしています。

今年もまた網干先生の講義を受けて、少し賢くなって大和の風に吹かれながら、あちこち見て廻れたらと楽しみにしています。

古代史講座

片桐　一夫

古代史講座は、只今は奈良時代の色々のことを、記録してある「続日本紀」の、最も重要な東大寺造建の、前後の頃のことを勉強しております。

講座を担当して下さってゐる鬼頭先生は、東洋大学の教授であり沢山の歴史書を著述してゐられる、立派な先生であります。司会をして下さる渡辺（馨）さん始め、古参長老の広田（好美）さん、清水（昇）さん、女性では、講座代表の西島さん、木庭さん、渡辺さん、光岡さん、西村さん、大浦さん、堀口さん、大井さん、八田さん、東郷さん達、夫々の歴史眼を持ってゐられる方々です。男性では、西村さん、内田さん、奥村さん、土橋さん、鈴木さん、亀田さん方、早い方は数年前から参加されてゐて、男性の皆様も、特に奈良時代の歴史を再勉強しようと、思ってゐられる方達で、やはり立派な古代史ファンの人ばかりです。只今男女合せて二十名だと思います。

司会の渡辺さん、広田さん、清水さんは、鬼頭先生の

大ファンで先生の著書を沢山持ってゐられますし、当日の勉強関係の資料等のコピーを、皆に配布して下さいます。

遉に是等の資料は、私達の参考になる有益なもので、丁寧に集めて夫をも勉強しております。

鬼頭先生は、「続日本紀」に対する正しい読解について、注意指導して下さるので、是にて私達の史眼を正確な方向へ直して下さり、私達にとって何よりの収穫になります。

さて講座は、司会の渡辺さんの指導で進むのですが、先づ清水さんから「続日本紀」の記事の十数項目の朗読を受け、其の項目について、渡辺さん、広田さんの説明や、解説があり、色々の質問が皆さんから出され、夫に対し鬼頭先生、渡辺、広田、清水さん達の応答があります。西島さん、木庭さん、光岡さん、西村さん、堀口さん、大井さん、東郷さん方も、蘊蓄に富んだ発表をして下さって、仲々勉強になる時であり、又男性の方々からも自分の考えを発表して下さって、珍説奇説が披露されることもあり、私も一番面白く感ずるときであり、此の罪のないフリートーキングの時が好きです。

其の締切総括は、鬼頭先生がキチッと応答説明して下さって万事OKです。考へれば、此の時間がやはり先生より正しい歴史眼を教えて戴く最良のときでして講座中、最も有益なことを獲得して、自己の史眼を正しいものにすることが出来ます。この事が他の歴史書を読解するのに、非常に役立つことになります。このような講座の質疑応答が続いて、2時間の古代史講座が終わるのであります。今回は受講中の皆さんの様子などを紹介させてもらいました。

詩吟の会

杉田　英二

詩吟を習い始めて二年半になります。ご近所の方とさそい合って、北部出張所の会議室で詩吟の練習をしております。他のグループの方とも顔見知りになって、今までよりも交流の場が広がってよかったと思います。

きっかけは、平成九年十月に花田さんに「詩吟を習いませんか」と勧められ、迷わずその場で決めました。花田さんの話しから、いつも犬を連れてよく散歩している

平成12年２月26日　吟詠新年宴会（猿沢荘にて）

方が、詩吟の吉本先生だということを知りました。

早速、吉本堤瑞先生を紹介していただきました。先生の部屋には優勝の賞杯・楯など多数飾られ、廊下にまで所せましと並べられてあるのでびっくりしました。

先生の御指導は、毎回コピーしたテキストを配られ、詩の作られた時代背景や作者の略伝・用字・用語などの説明をくりかえし懇切丁寧に教えて下さいます。ときには雑談をまじえた世間ばなしで笑わせたり、人生経験の豊かさを語って下さいます。吉本先生が詩吟でいつも言われることは、口を出来るだけ大きく開け、最高の声を出すこと、発音はハッキリすること、母音で上げることです。吉本先生は、毎日、日課として犬と三万歩あるき、長時間の朗詠で鍛えておられます。先生の詩吟は九十才を越えられたとは思えない程迫力があり、頭の下がる思いです。また、西尾堤久先生は、几帳面で熱心な御指導により着実に身につきます。詩吟の練習後は、いつもより空腹に感じられ健康にも良いと思います。また春秋には真風流日本詩歌吟詠会本部主催の歴史巡りのバスツアーに参加し、一層の親睦を深めております。

毎年、秋に行われる文化祭で詩吟の発表会をしていま

す。

北部出張所の詩吟練習日は、毎月第一・二・三水曜日です、どうぞ覗いてみて下さい。

中国語同好会

山根　桂子

以前、文化協会に入会されているご近所の奥様から、「いろいろな講座か開かれていて、とても楽しいですよ。」とお誘いを受けたことがありました。

まだ、その時は、子供も小さく、手がかかる時だったので、残念ながら、どの講座にも参加することが出来ず、何年かが過ぎました。

数年前、中国へ旅行することがあり、何の知識も無しに行きましたので、専ら、通訳の方に頼りっぱなしの旅でした。

あの時、少しでも中国語を勉強していれば、もっと、もっと、楽しい旅が出来た事でしょう……。

また、私の弟のお嫁さんが、中国広東省の出身ということもあり、以前から中国語を勉強してみたいと思っていたのですが、なかなかそのチャンスがなくて……。

そんな事もあって、しばらくして、ちょうど、文化協会で、中国語の講座が、新しく開かれる事を知り、早速参加させて戴く事にしました。

あれから、早、二年が過ぎます。

お仲間の方も、その時から今も五・六名一緒に続けて居られ、数名の方が新しく入会されて、いつも楽しく勉強させて戴いて居ります。

今年は、第一・第三木曜日に「中国語の基礎」、第二・第四木曜日に「会話」を中心に教えて戴いて居ります。

先生が、簡単な会話で質問をして下さると、ヒアリングの苦手な私は、いつもすぐに、答える事が出来ません。それでも、先生は、いつでも、気長に待っていて下さるので落ち着いて答える事が出来ます。

いつも、先生をはじめ、お仲間の方々にご迷惑をかけて、申し訳なく思って居ります。

毎年、実家には、中国からのお客さんが来られ、会話をするチャンスはあるのですが、「こんな質問をしてみましょう……あんな事を聞いてみましょう」と、いつも思っていましても、なかなか、ことばが出て来ません。

今年こそ、勇気を出してお話をしてみたいと思って居ります。

お仲間の中には、何度も中国へ行かれた方も多く居られ、旅行中のいろいろな、中国でのお話が聞けるのも、楽しみです。

また、いつの日か、私も、中国旅行へ行ける日まで、少しでも、会話が出来るように頑張って行きたいと思って居ります。

中国に関心のある方、中国語に興味をお持ちの方、お仲間になりませんか……。

拓本を楽しむ会

込山　博介

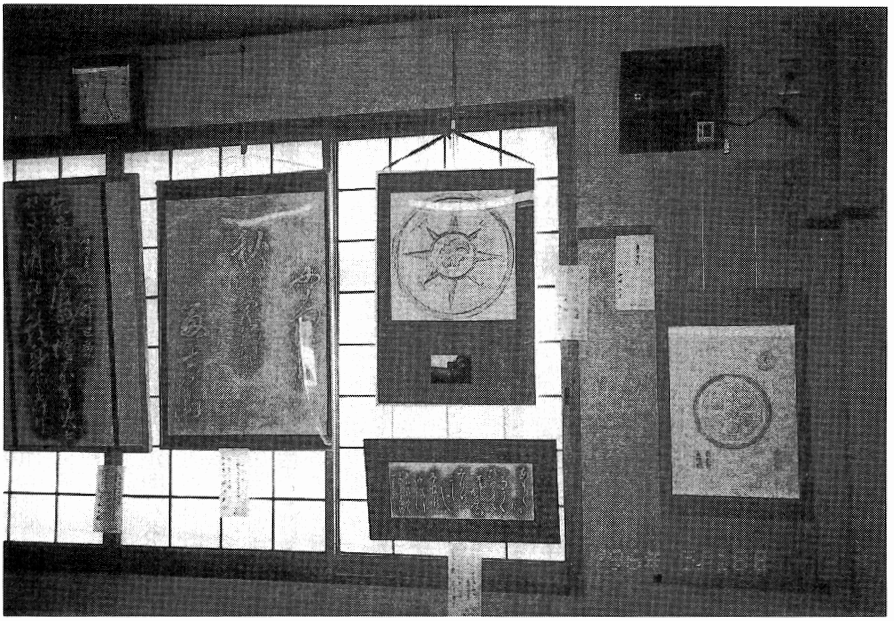
拓本行脚　十二年

三輪山をしかも隠すか雲だにも
こころあらなむ隠さふべしや
額田王（巻一・一八）

万葉のふるさと大和の地に、移ってきたのは昭和六十三年春で、その秋、文化協会の文化祭で拓本を見て、早速入会させてもらいました。当時の会長渡邊先生のご指導を得て、平成元年春、大阪南千里公園へ採拓に連れていただき、はじめて、万葉歌碑「茜さす紫野行き標野行き……」を見たときは、思わずかけより、何時か一生懸命にタンポを打っていました。それ以来山の辺の道に、伊丹市昆陽池公園に、等々あちこち連れていただき、だんだん深みにはまってゆく思いで、いつのまにか十二年の年が過ぎました。

はじめは、万葉の歌を求めていましたが、古歌、古事記、和歌、俳句、その他著名人の墨跡や文学碑等々、いろいろな碑に当り、おかげで思わぬ知識が得られ喜んでおります。

採拓した作品は裏打ちして、軸表装、額表装、パネル等をそれぞれ仕上げ、秋の文化祭に展示していますが、その間にも、平成二年六月には高の原南都銀行で、その翌年は朱雀郵便局で発表展示会を行い、平成四年六月には、平城西公民館の和室をお借りして発表会をし、ここでは展示場所が広いので、会員それぞれ二点ずつ出品し



ましたが、それはなかなかの盛会でした。その後、平成六、七、八、九年と引き続き平城西公民館で展示し、一年休んで又昨年同所で開催させていただき、本年もなんとか開きたいものと考えてをります。

ただ採拓するについての難点は、季節と天候に大きく左右されることで、良い時候であれば、会の皆さんと揃って遠足気分で出かけられますが、雨でも降れば中止となり、うらめしく空を見上げてをります。近くであれば、朝の天気を見て、急ぎ道具を車に積み込み一とっ走り、山ノ辺道へ行き、二三点採って昼頃帰宅したりしています。そうして、いつか十二年の月日が流れました。ふりかえると、楽しかった思い出ばかり残っています。皆さんもご一緒になされませんか。

いつからでも、どなたでも、お気軽に参加して下さい。連絡をお待ちしています。

小米花指なぞり読む八一の碑　山歩

地酒を味わう会

松本　敏夫

99年９月　丘の上食堂にて

〝年々歳々人同じからず〟だったか、早いもので我々の会も今月（５月）で１８７回を数えます。会の創立期から多少人の入れ替わりはあったものの、よくぞまあ〝飲む〟という一事のためにここまで続けて来られたなというのが現在の正直な感想です。

故岸本初枝さんが紅一点、〝闘・酒〟なお辞さず長い間頑張って来られたのが嘘のように思われる最近の女性陣の〝匂うがごとく今盛りなる〟健闘ぶりです。

「座」といいますか誰と隣り合わせになるか、毎月の顔ぶれ、座る位置によって話題も変わったり…楽しみの一つでもあります。今号は例会の模様を写真で紹介してみたいと思います。

まず、99年９月は神功４丁目の「丘の上食堂」にて会員・杉山氏の友人である芝田友吾さんのアコースティックギター演奏を聴きながら、「伯陽長」（鳥取）「丹沢山」（神奈川）などを飲む。21人参加。同月21日には生駒・宝山寺にて吉田初代会長のお世話により、当会由縁の物故者追悼慰霊祭を行う。10月は左京「ならやま」にて「若狭菊」（福井）など味わう。18人参加。

11月には恐らく最北の地酒の一つであろう「国稀」

99年 忘年会　御逢詞巣にて

2000年 新 年 会

2000年2月　酒蔵見学

（北海道増毛町）などを飲みながら歓談。右京「味杉」にて17人参加。年末は恒例の忘年会を般若寺の炉ばた料理「御逢詞巣」にて21人の参加でにぎやかにしめくくった。酒は「獺祭」（山口）など。

ミレニアム新年会は三条通り近くの「梁山泊」にて18人の参加で行う。酒は「八海山」（新潟）の純米吟醸など。

2月はちょっと趣向を変えて、土日にかけての一泊旅行。鴨鍋や夜更けて修羅となるわたし（桂信子）M社保養所「びわこ荘」名物の鴨鍋を囲み、定員いっぱいの20人の参加で盛り上がった。昼間の滋賀県内の二つの酒蔵見学では酒造りの説明を聞くのももどかしく、しぼり立てを喇き酒。2日目は琵琶湖博物館から信楽に寄った。

3月は地元「味杉」にて〝うどんすき〟。菊駒（青森）など飲む。19人参加。4月は新大宮の居酒屋「がんばりや」にて初の開催。純米酒「四万十川」などを飲んだのだが当日は、吉田氏の先導もと4人が四国遍路に出かけたため12人の参加となった。

こんな具合で毎月第2土曜6時から場所不定ながらどこかで飲んでいます。ぜひ一度のぞいてみてください。

ご試飲お待ちしています。

連絡は当会事務局長・鈴木（71－1690）または松本（0774－73－8184）まで。

銅の会

山崎　明

銅板レリーフの同好会も発足して三年の月日があっと云う間に通りすぎましたが現在は九名の会員でやっております。去年より丸福先生のお勤めのつごうでお休みが多かったのですが、グループ全員の創意工夫でお互切磋琢磨して和気藹々の裡に現在に到っております。

去年三月より会場を平城西公民館に移して文化協会同好会として活動しております。十二年二月には公民館フェスター二〇〇〇奈良公民館大会に作品を二十一点出展してかなりの好評を頂きました。銅板レリーフは余り知られていないようです。銅板レリーフとはどのようなものか紹介させて頂きます。銅板レリーフ（浮彫細工）ですが色々と工法があり、私達の使用している銅板はごく薄手のもので厚さ〇・一㎜のもので細工するにさほど力は

2000年２月20日　中央公民館にて

いりません。銅板に構図をトレースして細工を施して行き、浮彫の終わった作品を台所用ジフにて磨き後入浴剤六一〇で酸化して後ジフにて明暗をつけ仕上げ変色止めに透明ラッカーにて最終の仕上げを行います。あとは好みの額縁に納めて作品の出来上りです。

紙面では十分に分からない所がありますので、興味のお持ちの方一度実習をのぞいて見られませんか。月第一・三金曜日一時～四時迄実施しております。是非のお越しをお待ちしております。

場所平城西公民館二階講座室

俳句入門講座（ならやま句会）　堀池　敏子

牧野春駒先生を偲んで

「ならやま句会」を御指導して下さいました牧野春駒先生が遂に弥陀の元に旅立たれました。御入院されてもまた退院されて、より一層高い御指導をして下さいましたので、此の度も、そう信じていましたのに、それが叶いませんでした。偉大な先生を喪って誠に淋しい事でございます。

先生は季語の使い方とか吟行の仕方など、微に入り細に入り実力をつけて行くように御指導下さいました。句会の終わりの方で、入選句のどこが良いか、敢えて採らなかった句はどういう観点からかなど、句会が苦会であっても、次にはこのように作りたいという意欲を持たせて下さいました。亦現代日本の俳句会全体を見渡して、その中のならやま指導をして頂いた事は、私共貴重な体験をさせて頂いたと喜んでおります。

三月の元興寺・ならまち一帯の吟行会

十一月の先生の御句

残りたるいのち浮寝とともにあり

は、未だ私の心を捉えて離れません。

御冥福をお祈り申し上げ、会員の弔句を捧げます。

悼　牧野春駒先生

ならやま句会一同

天上に踏む露滋きことならん　　伊藤　柳紅

逝かれませ無への旅路に冬凪ぎて　上田　善次
優し師の小春に逝きて病ひ果つ　江崎　陽子
明暗を分ちて銀杏の散り敷きぬ　大浦小枝子
背布団やつととれしに師は黄泉へ　岡　良子
橙の青い実金の実ミレニアム　尾川　豊香
抱だかれしみ影温容石蕗の花　柏木　一枝
み仏に召されし師の君白菊に　喜多　まさ
山眠り禽啼山は喪に服す　木村　長子
世紀明待たずにとどく訃報かな　小久保孝子
名乗りして黄泉路ゆかれし冬はじめ　込山　山歩
もの枯れしとき天は師を召されたる　周藤　智子
弥陀のもとへ招かれ逝かる小春の日　曽根千鶴子
白菊や喜寿待たで師の召されけり　多田　文子
賜わりし短冊かかる冬座敷　辻田しま代
霜月や師の旅立のおだやかに　南村　照栄
黄落や大いなる教え賜わりぬ　西田たまみ
冬灯禽啼山の影淡し　西山佐代子
現世の苦業に克ちて石蕗の花　藤井よし治
冬の野の駒かけ去りしかなたかな　藤澤　陽子
浮寝まだ翔たぬに先師逝きたまふ　堀池　敏子

春駒師の訪ひ給ひしや鵯の声　溝口　清子
良き事と憂き事半ば年の往く　三井サチ子
二十分ほどは許され冬の旅　美保　義市
その雲のかなたに坐すや冬茜　村上　俊子
破れ蓮師の示されし招提寺　森田　陽子
散る菊や御仏召され逝き給ふ　山内　梅乃
み教えをこころに明日へ冬すみれ　和田美代子

絵画くらぶ

上田　善次

残された僅かな人生を充実した日々として大切にしたい悔いのない老後としたい。私はこんな望を胸に絵画くらぶに入会させて頂き、はや二年になろうとしています。

趣味を生かして余生を楽しむ、そんな夢が現実となって、毎週火曜日に絵画くらぶに足を運ぶ事となり、その事が私の最大の楽しみの一つになりました。然しながら、梶野先生はどの会員の皆さんにも一向に技術的な指導を行っている様子はなく、絵画の本質について話をされる丈で、最初の二、三ケ月は少し戸惑う感じで写生を楽しんでいました。

梶野先生の指導は私の様な新入生には難解な事が多く、先生の意図する所を自分なりに理解出来る様になったのは、半年も過ぎた頃だと思います。趣味の絵画と言えども、真理を探究しようとする心なしでは無意味な人生となり、生甲斐にもつながらないものだと言う事、技術ばかりを重視した一見上手く描けた絵画でも、そこに心がこもっていなければ芸術的には無価値に等しいものだと言う事、従来から、私の絵画に対する理解の仕方は大変な間違いであったと云う事、等々、老後の楽しみといった軽い気持ちで入会した絵画くらぶは梶野先生の卓越した芸術論――私にとってもまさに革命的な人生観――それは対象物をそっくりそのまま忠実に描く事しか知らなかった私にとっては、心を表現する事など想像も出来ない程むつかしい問題でした。

趣味とは言え単に自己満足だけの為に絵を描くのか、それともやるからには趣味の域にとどまらず、本質を究める道に進むのか。メンバーの皆さんが同じ様な考えで絵画に接しているとは思われませんが、教室は絵画を通じての社交場であると言う事には違いありません。写生

に熱中しておられる時の皆様のお顔を、それとなく拝見させていただくと美しい真摯な表情をして居られます。一週間に一度、月四回、こんなにすがすがしく幸福そうな空間で、余生のひと時を過ごされる事に非常な満足感を覚えております。私も最近になって自分なりに、梶野先生の理論を消化?して、自由な発想で描く事が出来る様になりたいものだと思う様になりました。

絵画の本質を究め、自由に自己表現の出来る境地になる事を目標に努力してゆこうと思います。

人生の岐路は、意外な所にあるかもしれません。絵画くらぶへ入会され、残された情熱に火をともす事をおすすめします。

押絵・木目込み人形同好会　谷口　直子

朝七時半、家を出て北千里駅から天下茶屋行きの阪急電車へ乗り込み四〇分、日本橋で近鉄電車へ乗り換え、所要時間一時間五〇分の道程、この長い車中の間も退屈しません。見慣れた景色を目で追いながらメンバーの顔と今製作中の人形を思い浮かべたり、時にはすでにOBとなられた方に近況を綴るはがきを書いたりしていると高ノ原駅へ到着します。始まる十時前になると大きな荷物と共に、それぞれの定位置に陣取った皆さんが作りかけの人形に手を加えていかれます。まあよーく見渡すと手は止まって、乍ら口だけ動いている方も少なくないのですが、「あの人形、いつになったら出来ることやら」と思案はいりません。協会の作品展迄には、おやと、思われるほど、それぞれに思いの込った可愛い人形が出来上っているのが、摩訶不思議なのです。

無理なく、明るく、大いにおしゃべりをし、時にはお菓子をほうばりながらのお人形製作、この教室に於いてはないのではと思っております。楽しい内に、午後二時半皆々さんと別れを告げて帰途につく、月二回の押絵と木目込人形の会なのですが。

人形だけでなく友達作りに一度覗いてみませんか。ご参加、心よりお待ち申しております。

万葉集講座

高橋はる江

寧樂宮

長皇子　與二志貴皇子一、於二佐紀宮一俱二宴スル歌

秋去者　今毛見如　妻戀尒　鹿將レ鳴山曽
高野原之宇倍

秋さらば　今も見る如　妻ごひに　鹿鳴かむ山ぞ
高野原の上

（巻一・八四）

この歌は、十二年前に頂いた講座プリントの、一枚目の一番最初に教わった歌です。皆さん、ご存じの長皇子の歌です。難しい歌です。でも好い響の歌ではありませんか。

これら、四千五百余首の『万葉集』の歌は、古代から現代に至る迄、綿々と受け継がれてきた文化遺産ではないでしょうか。

確かに難しい歌ばかりです。その難しい歌を咬んで含める様に教えて頂いております。

先生の解釈ばかりでなく、参考として外の先生方の解説等もあり、学者により、人により、考え方の違いなども教わり、とても好くわかるので喜んでおります。

この『万葉集』講座は「脱線『万葉集』」と言われています。本当に、言葉通りの《脱線》『万葉集』です。けれども、その《脱線》がとてもが楽しいのです。

例えば、「東歌」の時です。このような古い時代の「東歌」の話の時、ナント、「ローレン・ローレン」とウエスタンが出てくるのです。又、《お手玉》の歌が出てきた時は、幼き日の事が思い出されて、胸がジーンとなりました。しかし、流行歌「籠の鳥」が出てきた時にはてびっくりしました。本当に、何が出るやらわかりません。しかし、それが、又、楽しいのです。

そして、又、《文字》については、とても詳しくて、象形文字の話やら、一字一字、色々お話しをして下さいます。「あるく」と言う字は、昔は、「歩」と書いていたが、常用漢字では「歩」と書くようになった。これでは、

足の≪指≫の数が変になってしまうなど、楽しませて頂いております。

本当に楽しい『万葉集』です。

また、時には文法が入りますが、それが、とても詳しいのです。文法は少々苦手ですが、良い勉強になる事は事実です。

今まで頂いたプリントは、もう四百枚を超えようとしています。色々の資料等合わせると五百枚にもなるでしょうか。

本当に好くして頂いております。

先日、新しいテキストを頂きました。そこには一寸変わった歌が記載されています。

その最初の歌は、こんな歌です。

年切　及」世定　恃　公依　事繁

（巻一一・二三九八）

この歌は、たった一〇字しかありません。「柿本朝臣人麻呂歌集」の中にある歌との事です。

≪みそひともじ≫と言われる短歌が、ナント、マァ、一〇字しかないのです。このように十字しかない歌は、三首あるとの事です。十一字で書かれている歌も有るようですが、やがて勉強する事でしょう。

また、楽しみが、沸いてきました。

講座は、月の初めの月曜日です。

皆さんも、楽しい話を聞きに来て下さい。

パッチワーク研究会

住吉　紀子

昨年の六月にパッチワーク研究会に入会させて頂きました。打田先生に「運針が出来たらすぐに出来る様になりますよ」と優しくご指導頂き、もうすぐ一年になります。

先輩方の大作を見せてもらいながら秋の文化祭には、クッションを二枚出品させて頂きました。袋物・ウサギ・フクロウ・竜・等の小物等少しずつですが、一つ一つ楽しく作っております。タンスで眠っていました母の着物

や小さな端切れの組合せで、見事に新しく壁かけ、ベットカバー、コタツカバー、等に甦る、楽しみながらのリサイクルだと思います。

打田先生、初め皆様とは和気あいあいで、親切で暖かい方々ばかりです。

これからも良ろしくお願い致します。

押し花を楽しむ会

松村せつ子

この会が文化協会の講座となって、今年でもう四年目となります。秋の文化祭に出展させていただくのも十一年度で三回目でした。

一回目よりは二回目、二回目よりは三回目と、毎年皆さんの力作が出品され、「年々いい作品に出来ていますね」等と言っていただくと嬉しくなります。

いい作品を創ろうと思いますと、美しく花を押すという事が第一条件です。花によって、含まれている色素が変化して、押し花にした時の色が、生の花の時と全くちがう色になっていたりしますとがっかりです。

押し花にする花は満開ではなく、七、八分咲き位の時が意気が良く、やはり、花の一番美しい時に押した花は出来上りも良く、もう少し鑑賞してからと欲を出しますと、押し花の出来上がりはもう一つの様です。天候にも左右され、雨の後、朝露の残っている時等は、湿気が多くて上手に乾燥しませんので、タイミングも大切なポイントです。何度か失敗をくり返しますとだんだん要領もわかり、美しい押し花を作ることが出来るのですが、私などは未だに試行錯誤の状態です。

女性は、いつも美しいものに憧れを感じるのでしょうか。毎年文化祭の後に新しく会員さんが入って来られるのですが、昨年はどうした事でしょうか、一度に十数名の方が入会され、びっくりと同時に喜んでおります。

先生も大変な事と思いますが、少しもいやな顔をされず、誰にでも丁寧に教えて下さいますので本当に感謝しています。

五月、六月頃ともなりますと、皆さん、今年の文化祭にはどんな作品を出そうかと、秘かに思案されている様です。

私も毎年文化祭に出品した後は、玄関や居間に飾って、

一人悦に入っています。

美しい花を、押し花として残す事が出来るなんて、花もきっと喜んでいてくれるのではないでしょうか。

これからも、美しい花、可憐な花、珍しい花、いろいろな花と出会い、気長に押し花を楽しんでゆきたいなあと思っています。

先史学講座

皆藤　甫

この講座は、ご案内のごとく、平成十一年四月十六日に新たに開講され、奈良大学文学部教授　泉　拓良先生によって、原則として毎月第三金曜日に講義が行われております。毎回約三十名ほどの会員が出席し、熱心に先生のお話しに聞き入っております。

「先史学」とは聞きなれない言葉ですが、広辞苑をひいてみますと、先史時代（文献的史料が全く存在しない時代。普通には新旧石器時代をいう。我国では縄文式時代・弥生式時代をいう。）のことを研究する学。考古学が人工遺物の研究を主とするに対し、自然遺物の研究にも主力をそそぎ、動植物・地理・地質などの理学に深い連関をもつ。又、先史考古学は、過去人類の物質的遺物によって、人類の過去を研究する考古学、とあります。

要するに人類の起源・進化を科学的に解明する壮大な規模の学問といえると思います。したがって、バリバリの現役で大変お忙しい先生が、参考資料のコピーを大部に作成配布してくださるばかりか、中東シリヤ・レバノンの遺跡調査に際し収めてこられた写真をスライドで説明していただく等、私達素人に理解させるべくご尽力していただいております。

最近わが国でも、宮城県上高森遺跡や埼玉県小鹿坂遺跡で、五十万年前の石器や遺構が発見され、先史考古学が脚光をあびております。

これからますます、この分野の研究が進むことと思いますが、われわれ日本人のルーツも解明されることになるでしょう。大変興味をもって出席させていただいております。

筥作りの会

林　美智子

ほんの少し、右肩あがりに掛かってしまう色紙かけ。両手をそえてそっとひっぱって出すのが最良の小引き出し。金ぴかのつのをつけたかわいい兜。メガネのケースに、テレビのリモコン入れ。我が家のあちこちに、便利グッズが増えていきます。これらはすべて、筥づくりで教わり手づくりした小物達です。

今まで、少々お金をかけた調度品こそ、室内を飾るものと思っていたのは、まちがいだったことに気付きました。部屋の空間にぴったりの大きさの、自分流の形で、好みの色を駆使したこれらの作品こそ、何よりも値打ちのある道具だと思いしらされた気がします。

教室では、大きい衝立、小さい屏風、新聞ラック、薬箱、姫鏡台、糸入れの重箱、アクセサリー入れと、あらゆる自分用の必需品を作っている人でにぎわっています。完成したいい作品をみたら、私にもできそうだと思ってしまいます。しかし、製作中、左右の寸法が合わなくなることがよくあります。そんな時は、先生のところへ預けます。すると次回までに、驚くほどぴったりと調整されてもどってきます。こんなことのくり返しですが、とてもボール紙で作ったとは思えない作品が出きあがります。

料理店で、テーブルに置かれた敷紙も、新聞にはさんであったチラシも、空箱も、干物の入っていた竹かごも、何でも工夫しだいで作品に変わってしまう、今はやりのエコロジーの最先端をいっているのではないでしょうか。

このように筥の会は趣味と実益を兼ね備えた意義のある会になっています。それに会員の皆様方のお人柄がすばらしく創作についての話し合いはもとより、その他の話題にも興味引かれるものが多く、ほんとうに楽しい集まりになっています。これらからもこの会のますますの発展のために、どうぞお一人でも多くの方に参加してくださいますよう、ご期待申し上げますとともにお願い申し上げます。

「……歩く会」

廣田　省吾

いつだったか、私達が「……歩く会」で歩いた時、神社の境内をお借りして昼食をしていると別のグループの歩く会の人達が来ました。人数は百人か弐百人か、とにかく多数の人達でした。その人達は本殿を見向きもしないで通過する人、ちらっと見て通り過ぎる人、足を止めて拝む人は十人に一人くらいだったでしょうか。その人達の顔は、今日は「ゆっくり歩いていたら、最終地点まで歩けないわ」という顔で、のんびり食事を楽しんでいる私達をちらっとも見ないで、その一団は風のごとく去って行きました。私は半ば呆然と見送っていましたが、私達の「……歩く会」は、なんとのんびりしているなあと楽しくなりました。これからも文化協会の「……歩く会」は、野山の草木を愛で、四季の移ろいを肌に感じて楽しく歩きたいと思っています。

平成十一年度は左記のように歩きました。

四月十八日（雨）中止

99年５月21日　蟹満寺にて

五月二十一日（金）晴　南山城　棚倉から玉水迄

ＪＲ棚倉駅は以前山城町を歩いたときも降りたので、なじみのある駅です。（平成八年）駅のすぐ前、由緒ある式内社である涌出宮で、ちょうどおられた宮司さんに謂われをお聞きする。郷土と密着した神様です。田舎道を北へ歩くと蟹満寺です。本堂にはいると正面に本尊の、銅造釈迦如来坐像が安置されている。有り難く座っていると、テープが流れて来て蟹の恩返しの物語りが語られます。蛇は何時でも損な役割やなー。隣の綺原神社の境内で昼食をしました。

やや汗ばむくらいになって、新緑の山を右手に見て北に歩くと、宇治川の合戦に破れた、後白河天皇第二王子の以仁王が祭られているという高倉神社にお参りし玉水駅へ。

距離的にも一寸物足りないような気もしましたが、十分楽しい一日でした。　（参加者十七名）

六月二十日（日）晴　棚倉から玉水迄二回目　（参加者四名）

99年９月19日　二月堂に向う道にて

七月九日（金）晴　東大寺～春日神社～白毫寺

奈良の東部、春日山麓を歩きました。奈良県庁の東側の駐車場の片隅の〝奈良の八重桜〟から二月堂、春日大社、新薬師寺、白毫寺迄歩きました。奈良の北東にある柳生は、小説やテレビ等でよく知られていますが、宝蔵

99年11月26日　木津町上津遺跡にて

院流槍術のお墓があるのがご存じですか?。白毫寺の西の墓地の中にひっそりと並んでおりましたが、荒れ果てていて、わびしい感じがしました。

知人や親戚の方に奈良の案内を頼まれた時、今日歩いた道がお役に立てばと思います。　（参加者四名）

九月十九日（日）晴　東大寺〜春日神社〜白毫寺の二回目

十月二十四日（日）晴　木津町

私達の住む平城ニュータウンの隣の町、木津町を私達は案外知らないのではないか――そんな思いで歩きました。

近鉄山田川駅から東へ。藤原百川公夫婦のお墓。それから、延喜式内社の相楽神社へ。相楽と書いて〝さがなか〟と読みます。木津の町を東へ横切って、ＪＲの線路東側に岡田国神社があります。十月二十日、二十一日の祭礼で、特に、二十一日には布団太鼓祭が行われるとの事です。

木津川の南にある和泉式部の墓と伝える小さな五輪塔

2000年３月24日　西大寺にて

を見て、東大寺を焼いた罪で、木津川の河原で斬首された平重衡（しげひら）の首を洗ったという小さな池があり、重衡が最後に食べたと言われる柿の種が成長して、実がならないと言われている柿の木がありました。ところが、今日きてみると、その柿の木に、沢山小さな実がなっていたのがおもしろかったです。〝木津〟の謂われが（港）と言う意味であることを知りました。木津川が如何に平城京にとって重要交通路であったか、又、木津はそれに伴って港として栄えたのでしょう。その水運を管理した役所跡といわれる上津遺跡で解散。ロマンの溢れる一日でした。

（参加者十七名）

十一月二十六日（金）晴後曇り

木津の二回目

（参加者二十一名）

平成十二年三月二十四日（金）晴後曇り

西大寺　西ノ京

曇り空から時たま晴れ間がのぞくような天気で、雨が心配されましたが行くことになりました。

近鉄平城駅で降り秋篠寺へ。あまり知られていないの

ですが西大寺奥の院へ。叡尊の墓といわれる五輪の塔がある。西大寺から菅原神社、大仏殿の試みの寺と言われる喜光院へ。住職のご厚意で床几をお借りして昼食。この頃から風が強くなり寒くなる。垂仁天皇陵のお堀の側を通り、唐招提寺から薬師寺へ。体が冷えてきたので、途中食堂に入り、暖かい飲み物を各自注文する。薬師寺へは二名ほど人が、寺の中へ入っていかれました。残りの人達は近鉄西の京より帰途へ。

三月末とは言え、寒い一日でした。（参加者十七名）

私が平城ニュータウン文化協会に入り、「……歩く会」に参加する様になって、分かった事は、奈良に住んでいながら、奈良の事を何も知らなかったと言う事でした。

「……歩く会」で歩く度に、知らず知らずのうちに何かが身についているようです。それがとても楽しいです。

御参加くださる皆さん、そして忙しい中から下見に来てくださる皆さん、有り難う御座居ました。今後も楽しく歩きたいと思っています。

お願い。楽しく歩く場所を、御存じでしたら、教えてください。

野草をしらべる会

前川　良雄

長くつらい冬の日がようやく過ぎ去り春らしい暖かで楽しい花咲く季節になりました。三号公園ではブランコも修繕され、ベンチも新しくなり、日本タンポポが一面に咲きそろって黄色の敷物のようである。他に野草も次々に顔を出している。犬ノフグリは紫色の可愛い花を咲かせ、スズメノエンドウやカスマ草も紫色の豆科の花を風に吹かれてゆらりゆらりと咲いています。スイバとギシギシは大きく広い葉の中にぶつぶつの背の高い花を咲かせ、ヤエムグラは五本も六本もむらがってはえている。ヨモギ、ハコベ、セリ等々、西洋タンポポは日本のタンポポと違って年中咲き、ガクのそりかえっているのが西洋タンポポ、日本のタンポポはガクが花びらにそって上の方にのびています。西洋タンポポに負けていた日本タンポポは最近押し返して勢力を伸ばしているようです。

梅は白い梅は花が散り可愛い実が成っています。桜も散り八重桜が咲き、カリンも可愛いい桃色の花をつけ、松も新芽が伸び、初夏の新緑を思わせます。

平城ニュータウンでは赤い道と右京小学校の北側の道に野草がたくさん見られます。ハコベ、ウシハコベ、スズメノエンドウ・、スズメノ槍、スイバ、ヨモギ、ヤヘムグラ、シロツメグサ、チガヤ、スズメノカタビラ、カラスノエンドウ、カスマグサ、ツメクサ、血トメ草、ムラサキカタバミ、フキ、春ノノゲシ、ミミナグサ、等が春を待っていたかのように一度に芽生いてきました。

子供たちがこれらの野草や植木に興味をもってくれることを希望して報告を終わります。

短歌を楽しむ会

寺嶋りくお

短歌遍歴

短歌を師について習い初めたのは三十五年前、大阪市内の大毎広告に勤めていたころで、同時に詩吟を習い、東住吉区で青年会を作り、活動をしておりました。歌人の島田兵三先生は、アララギ派の「あけび」の選者もしておられ毎月一回、十人程が集まり初めの一時間を万葉集の講義、休憩時間に漢字の書取り、後の一時間で短歌の添削をしていただいておりました。穏やかなお人柄でしたが短歌には厳しく「これは理屈です」とか、「説明に過ぎません」とか、「含蓄がない」、「余情がない」とよく言われました。

詩吟は、五年程で準師範になり、順次、師範、正師範兼会員百名程の地区長をし、青年会は、大阪府教委の国内研修（十五日間）に参加したり、青少年国際親善で訪米（三十五日間）したりしましたが、結婚を期に後進に譲りました。短歌は、先生のご高齢を理由に十年間続いた「田辺万葉の会」を閉じることになり、その後は折に触れて作歌する程度で「あけび」も「大阪歌人クラブ」も辞め、投稿することもなくなりました。

結婚後は、詩吟だけを続けていましたが、入社十六年めで脱サラをし地元で不動産会社を創業。子供が小学生になるのを待って町内会に子供会を作り、他の町会長にも働きかけて各町内にも子供会を作り、連合子供会を結成しました。同時に小学校から中学校へとPTA活動も始まり、町内会や業界の役員も併せて、とても詩吟まで手が回らないので先生の独立を期に二十五年続いた詩吟

平成12年 新年会での歌会の人たち

も辞めました。

そして、十年前、バブルがはじけて不動産業界も不況になりましたが、それまでに自宅兼の賃貸マンションや賃貸の店舗付住宅を三軒建てて、貧しいながらも親子四人の生活の確保ができ、大気汚染や自身の高齢化とともに、持病の喘息の発作も多くなって来たので二年前、試みにと高の原に隠居しました。

高の原は、針中野と違って緑が多く、空気が澄んでいて病院やプールも近く、何よりも「短歌を楽しむ会」の人たちがとても大事にしてくださるので、とても居心地が良いのです。また、新しい吸入薬によって発作は少なくなり、毎月多くの短歌が湧き上って来て月一度の歌会がとても楽しく心待ちにしています。

独り暮しは淋しくないだろうか。「おさんどん」はできるのだろうかと、心配しつつ始めた仮りの宿が、最近では背中に羽根が生えたように、奈良の伝統行事を短歌に写真にと「追っかけ」をしており、高の原が終の住家となりそうです。

手踊り同好会

毛利　公子

一九九九年六月、尾瀬旅行中、木道で転んで、右肩を骨折しました。怪我とは、広辞苑に　①思いがけず傷ついたこと。きず。負傷。②あやまち。そそう。過失。③不測の結果。偶然。となっていました。私の場合、何の障害もない所で転び、②のそそう、過失としか云いようがありません。一瞬の不注意が、一生仲良くつき合っていかねばならない持病のひとつになりそうです。全身麻酔で二度も手術し、手踊りのけいこも、四カ月休ませていただきました。日常生活に支障がなくなっても、踊りの形がまともにできず、踊れなくなったらどうしようとずいぶん悩みました。毎日、リハビリに通いながら、何とか文化祭に、出させていただきました。お見苦しいポーズが、多々あったと恥ずかしく思っています。私が、習っている「一葉会」の初舞会でも、皆で「ボウリングだよ人生は」を発表致しました。私事ながら、全国ボウリング場協会マスメディア特別賞受賞の、長男インディ作詞、作曲の唄で踊らせていただき幸せでした。

2000年1月5日　一葉会 初舞会にて

これまでけいこした、「まつの木小唄」「ボウリングだよ人生は」など、おさらいし乍ら、「山中節」「荒城の月」「お立ち酒」を、少しずつ練習しています。

次の手踊りは、「おてもやん」できたら良いなと、思っています。

休憩時間、お茶とおしゃべりも楽しみのひとつです。

踊りは、全くはじめての方も、和服に興味ある方も、一度、手踊り同好会、のぞいてみてください。

英語講座

藤戸　洋子

英語が話せれば、海外旅行が数倍楽しめるだろうと、英語講座に入会して数年。寒さに弱い私は、毎年冬眠をしてしまいますので、成果は行きつもどりつ……というところで、海外旅行をしても「会話を楽しむ」というには程遠い感じです。それでも最近は、映画を観ていても字幕を必死で追うだけでなく、耳から入る英語も楽しめる余裕ができたような気がします。

月二回、九時半から十二時までのこの講座は、鎌田先生のご指導で平成とともにスタートし、今年十二年目を迎えます。前半は初級コース、後半は中級コースですが、最近では全員全コースを受講しています。間に英語で歌う歌、またはフリートーキングが入ります。今までメロディだけを口ずさんでいた曲が、急に英語の歌詞付きで歌えるようになった喜び（以後しばらくは毎日同じ歌ばかり歌っています）また、フリートーキングでは、バラエティに富んだ情報、特に男性の方の専門的な仕事の分野のお話などは、別の社会を覗いたようで、楽しく、充実した時間です。このように、目的もレベルも違ったメンバーが二時間半、共に楽しく学べるように、ご指導に工夫をされる先生のご苦労は大変だと思います。

ところで、昨年は発足以来初めて文化祭に参加しました。演目は、童話「The Giving Tree」の一ページづつを暗唱と、英語の歌二曲。「ケ・セラ・セラ」と、ちょっと動作の入るかわいい童謡「Five Little Snow Men」です。初めてのことで、練習の時からあがってしまったり、モタモタ、ワイワイと笑いが絶えず、とても可愛い風景でした。学芸会を思い出して全員若返った思いでした。

また、退会されていたスタート時からの会員、片桐さんがお元気で参加して下さり、本当に有意義な「初出演」になりました。

料理を楽しむ会

岡本　一枝

毎月第三木曜日のお昼時は、平城東公民館の料理教室からは、食欲をそそるとてもよい匂いが漂ってきます。

十数人の料理を楽しむ人達が集い、旬の食材を使った家庭料理、お菓子等を作っているからなのです。

料理は毎日するもので、家庭の台所をあずかる者は、血となり肉となる命の綱の責任もおっておりますが、人間に味覚がある以上、食べ物は美味しく、そして、日々の暮らしの中では楽しく作りたいものと願っています。

私達の会も、講師の松村せつ子さんを中心に、時にはメンバーが得意のメニューを披露したりして、近商ストアー付近で、誰にでも、何処でも手に入る食材を使った決してぜい沢でない家庭料理を作って、皆で楽しんでいます。

因みに、一番新しい四月度のメニューをご紹介しますと、▲桜の豆ご飯　▲甘鯛の若草蒸し　▲豚肉と春キャベツの蒸し煮　▲蟹蒲鉾の卵巻き清汁　▲桜饅頭　等の春の香りと風味、やさしい色ずかい一杯のご馳走でした。配膳されたこれらを、おしゃべりしながら食する一時は、まさに「口福」の一言につきます。

会に参加させて頂き、新しい料理を覚え、自分の料理になるように、試したり工夫したりすることで、料理の「理」を頭と体で感じるようになり、今迄の自己流のわがままなやり方を反省したり、多くの発見をしたりの一年でした。

手塩にかけて作ったことのある料理のレシピが、生命に継がるばかりでなく、その思いも一緒に、ファイルに一枚ずつ増えていくのも嬉しいものです。

料理を楽しく作ることをモットーにしている会に、皆様どうぞお気軽にご参加なさいませんか。お待ち致しております。

フランス語

木庭　和子

かつて、国際用語の第二位を占めていたフランス語も、それを公用語とする国の減少に依り、この所、国際会議の場合等の他は衰退しはじめているようです。

それに同調するわけでもありませんが、わがフランス語グループも、会員の病気、就職等々で低調に拍車がかかったような状態です。でも孤塁を守り、常に出席する四名の熱意は反比例してなかなかのものです。

ＮＨＫのラヂオフランス語の入門語講座のテキストをテープに、それがもう？年も、門の処で立往生という体（てい）たらくです。会員の中でもバイリンガーの方がいらして杉山利恵子先生に、テキストの中のマラルメの詩の文法的質疑を出されました。懇切なお返事がはるばるフランスから届いた時には、皆感激して読ませて頂きました。

こんな高度な語学は私には一寸縁のないものですが、簡単な日常会話を軽快にやりとり出来るように――と希いながら、そしていつの日か、フランスの地方都市へホームステイする日を夢みながら、倦まずたゆまず、のんびりと続けています。

来年度から、長年の学究生活に一区切りをつけられた根来先生が、担当して下さいます。フランス大好き、南欧について御造詣が深い先生の、豊かな御教示を楽しみに――同好のお仲間の増えますように――と希っています。

表装の会

山本　康彦

私達の会は、西島芳子先生を含めて、合計八名のグループです。前回『層富』で講座発足の経緯（いきさつ）が初めて紹介された通り、『掛け軸を作る会』であります。掛け軸を作るには、先づ拓本や書、絵なりの作品の裏打ちをしなければなりません。裏打ちされたものは、皺（しわ）が伸び、整理され、厚く補強された訳で、そのまま額に入れて額装として飾る事も出来ますが、この裏打ちされた作品を掛け軸に仕立てるのが私達の会の主な仕事なのです。材料の余りを利用して、小さな『色紙掛け』や『はがき掛け』なども作ります。

八名の会員と言うのは一見少ない様ですが、掛け軸を作る為めには大きな作業台（ピンポン台位の広さ）が各自一台必要になり、教室をギッシリ一杯使うので、これが限度となってしまいます。教えて頂く場合も先生と一対一、所謂ワン・ツー・マン。各自の工程は各々、区区ですから、黒板に書いて全員同時進行と言う訳にはいかず、先生は一人で大変だなあと、いつも思ってしまいます。その工程も完成する迄には数多くの工程を正確にこなさなければ、完成品は狂ってしまって、良いものが出来ない。最初は作品が掛け軸にさえ成れば良いと、それこそ無我夢中で作り、一本目が出来た時はこれが自分が作った掛け軸かと思うと、正直、子供の様に嬉しかった。しかし、だんだん一本が二本、二本が三本と進むごとに、やはり良い仕事の軸をと欲が出て来ます。

確かに掛け軸は家の一番上座と言われる床に飾るものですから、各工程を一ヶ所でもおろそかに出来ず、作業中のその持続力は大変な事は大変です。それ故、一日の作業が終わり、緊張が解け、皆んなで先生を囲んで、お茶にするのは本当にほっとする楽しい時間です。寛いだ自由な話しが飛び交います。

今の会員は拓本なり書なり絵を自分で創作し、表装を楽しみたい人がほとんどです。表装の楽しさは他の作品や自分の創作品を自分の思い通りに、しかもある程度経済的に仕上げられる事にあります。そして、出来上った作品を贈り物などにすると喜ばれます。

しかし、先生から丁寧に教えて頂いているにかかわらず、未だ思い通りに仕上がった例がなく、何処かの工程でミスをおかし、苦労の割には失敗のくり返しをしています。こんなことを書くと又、敵を増やしそうですが、『年は熟年、作品は未熟』です。それでも懲りずに手間暇かけて私達が表装に精を出すのは、何かに打ち込めるものを持つ事が、心の「ハリ」を実現させてくれるからでありましょう。物を作っていると老ゆる暇が無いと言いますが、その意味では、自画自賛で恐縮ですが、先生を初めとして全員、生活に前向きで、ただ年を重ねる事を好まぬ爽やかな好感持てる仲間です。

さて、『表装の会』に参加して、私達が変化した事を最後に御報告致しましょう。それは皆が口を揃えて言うのですが、展覧会などへ行った時、今までは作品だけを見ていたのが、軸装の場合は必ず軸を詳しく見て、全体

的に鑑賞する様になった事です。間違いなく鑑賞眼が広がったのです。出来れば、軸の裏側まで見たくなる時すらあります。そんな事をしたら会場の係りの人に叱られてしまいますが、今まで全く関心の無かった軸装が身近に感じられる様になったのでしょう。

思えば、表装と言うのは正に黒子の様なもので、作品展示場に表装作者の名が表示される事は、表装の展示会でもない限り、ありません。あくまで、作品を引き立たせる為めのワキ役に徹しています。美術館で、名作にマッチした格調高い軸を見た時など、その名も無いワキ役の先達が偲ばれます。こんな経験は今まで無かったことでした。

表装は千年の歴史を持つと言われる貴重な文化。一枚のプリントされたハンカチが表具されて立派な作品となったり、ちょっとしたものでも表具によって見違える様に変身するのは、正に表装の力だと思います。しかし、作品を立派な材料で飾る事が表装ではなく、あくまで作品をどうしたら引立せる事が出来るか、そして一歩でも良い仕事に近づけるか、これが私達の目標なのです。

園芸の会

北村　孫衛

今年もヨーロッパ花事情をこの目で見たくて、ドイツから東欧をめぐって来ました。

カタカナでガーデニング、わが日本では家庭園芸、花盛りは日本の方が美しい。

売っている苗の種類の多さ、量は断然日本の方が豊かであります。断言出来ます。外国では茶花になる、山野草コーナーなんて凡そ無い。わが園芸の会にはこの茶花、山野草コーナーがあるから良い。嬉しい。

茶花、山野草には一年草もあるけれども、多くは多年草（宿根草）です。

現在、人気の花はカラフルで育て易く長期にわたり咲き続けるものです。例えばシクラメンやスミレ類を十月に花付きで買って水と肥料次第では五月一杯まで楽しめますから半年以上です。夏の花でサルビアは三月彼岸に花付き苗を買えば十一月中楽しむことが出来ます。少し霜除けをすれば正月過ぎてもまだ咲いています。でも見飽きて適当な時期に処分してしまいます。ＮＨＫの趣味

の園芸でも出版物も同じです。

これは園芸のみならず、私達の住居についても同じです。地震の無い西洋にあっては、何百年でも同じ家に居住していますが、日本では他人の住んだ家は、取り壊して一旦更地にして建て替えるのが普通になりました。

入居が始まって未だ三十年と経っていないわがニュータウンにあっても同じで、この大きな無駄が当然の事の様に行われています。

宿根草は植っ放しで毎年咲くは、畠や庭に植えてある時で鉢では毎年株分けをして育てる大変な労力を必要とします。その上種類によっては花のあるのはほんの一～二週間で一年の大部分を株の維持に費やさなければなりません。それでも花好きにとっては育てたい。

君影草（スズラン）なんていい演歌のスズランもそうです。ボタンも芍薬だってそうです。

スペースが無い、あれも育てたい、この花も欲しい。そんな話で盛り上がる園芸の会ですが、ヨーロッパを巡っている間もいつもこんな事を考え乍ら歩いていました。

写真同好会

寺嶋りくお

伝統行事の「追っかけ」

五月四日（木・祝）の昼食後、夕食の弁当を持って薬師寺・玄奘三蔵会の万灯会を写すべく出かけました。早めに出かけたのは、梅原猛先生の講演「仏教東漸」を聞きたいと思ったからです。

午後三時前に写経道場に着くと、すでに玄関には人があふれていましたが、背伸びをして道場内を見渡すと中程が空いているので一旦廊下に出て、障子を開けて中程の隅に着席しました。当然仏像の安置されている正面で講演がなされるものだと思っていたものが「皆さん、北側に向き直ってください」と言われ、中程が正面になりしかも、私の着席したすぐ横が演壇だったのです。著書では舌鋒鋭い先生が穏和なお顔で、やさしく諭すようにお話しされたのも印象的でした。

二時間程で講演が終わり、境内に出ると三千の置灯籠が整然と並べられており、十数人のカメラマンが三脚を

据えていました。その中で伝統行事で出合うグループの横に私も三脚を据え、準備を整えて夕暮れを待ちました。午後六時半「ろうそくを立てるのを、お手伝いください。」というアナウンスがあり、私も二十本程のろうそくをもらい、神官から火を移していただいて一本一本「これは父のため、これは母のため」と心で念じながら立ててゆきました。

全部の灯籠に明りが点るころには初夏の空が藍色に染り、心が震えるような感動を覚えました。そして、思わず「ここが薬師如来がおられるという瑠璃光浄土だ」とつぶやいていました。

高の原に隠居して二年が経ちますが、毎月発行しています写真同好会会報の末尾に「その他のイベント」として、奈良の伝統行事の日時を分かる限り載せ、自らもできる限り拝観に行っておりますが、身近で開催され、しかも無料であることが多く、カメラマンにとってこれ程恵まれた環境はないと思います。しかし、撮影に来ているのは県外の人が多く、まったくもったいないことです。

ことしの若草山焼きのように、三年ぶりに完全な形で行われる行事もありますし、シャッターチャンスを逃すこともあります。来年があると思わず「一期一会」できるだけ撮影に行ってほしいものです。よい作品づくりは「行動と工夫」です。せっかくの機材と技術と感性を眠らせないでください。

私たちの写真同好会は、私を含め初心者が多く、しかも初心者ほど熱心です。どうぞ、お手持ちのカメラで私たちと一緒に写真を楽しみませんか。写し方のノウハウは惜しみなくお教えします。ものの見方が変わりますよ。

山歩きの会

西幹　友雄

山歩き会も今年で満十五年になりました。これもひとえに文化協会の役員並びに会員の皆様のご支援、ご協力のお陰と感謝しております。

山歩き会が発足した当時は、先を争って未踏峰や未踏ルートに登ることが多かったが、私を始め会員のメンバーが俗に言われる中高年になり、最近ではあまり無理をせず鳥の泣き声、そよ風や木々のざわめきに耳を傾け、又季節の花などをゆっくりとみながら山歩きしております。

現在の山歩きの主流は中高年であるといっても過言でない。その人たちが若い人とくらべて体力、気力は必ずしもおとっているとおもいません。又山には特別な体力はいらない。しいて言えば持久力のある人そしてある程度の重さのザックを背負えることが出来ればよい、歩くことそんな基本的なことでも、山には山のノウハウがあり、無理なく歩く、安心して歩く、登山中、コンデションを保ち無理なく山を楽しむにはやはり自分に適したベースを組み立てるのがベストです。かといってコースタイムをまったく無視してしまうと、そもそも行動予定が立たなくなってしまう。それではどのようにすればよいか。いわば自分用のコースタイムを設定しておくと、マイペースを維持し、余裕のある山歩きができるでしょう。自然が好き、歩くことが好き、ならば山歩きに向く体力があるといえる。そしてあきらめない精神力がすこしそなわっていれば山は登れます。最後にあまり山歩き適していない例を一つ二つあげます。当たり前の事ですが、歩くことが嫌いな人、汗をかくのが嫌いな人、グループの和を乱す人。

今年度の山歩き会のおしらせ

六月度（荒地山）　七月度（国見山）

八月度（鞍馬山）　九月度（雲取山）

十月度（千頭岳）　十一月度（一徳山）

十二月度（愛宕山）

読書会

林　美智子

平成十一年度、読書会の活動

四　月　井上靖著　星と祭

五　月　文学散歩　びわ湖方面、観音めぐり

六　月　シドニー・シェルダン著　陰謀の日

七　月　宮尾登美子著　きのね（上・下）

八　月　枚方の自然農園・杉の五兵衛へ

九　月　杉本苑子著　月宮の人（上・下）

十　月　足立巻一著　虹滅記

十一月　開高健著　ベトナム戦記

十二月　司馬遼太郎著　菜の花の沖（一・二）

一　月　司馬遼太郎著　菜の花の沖（三・四）

二　月　司馬遼太郎著　菜の花の沖（五・六）

「ハイ。次の課題図書です。がんばって読んでね。」と、菜の花の沖　全六冊をどーんとまとめて渡されて、「エッ。」と私をはじめ二、三人は読書会メンバーなのを忘れてひるんでしまう。まだ読む前なので、もちろん内容はわからず、ただ冊数だけでしんどさを感じてしまう私と二、三人（この際、仲間に入ってもらうことにする）が、グループの足をちひっぱり、レベルを大いに下げてしまっていることを、常々反省している。

しかし月一回の読書会は、楽しくてほとんど欠席者もない。課題の半分しか読めていなくても、好き勝手の感想が許される。お互いの意見を認め合っているのもうれしい事だ。読後の感想は、自由で個人によって違ってあたり前なのだから。

読みが深く、知識の豊富なNさんの話を聞かせてもらっているだけでも勉強になるし、今は指導者のいない会ながら、話し合いは盛り上がる。

ここ一、二年読んで、特に印象に残った作品をとり上げると、98年度に読んだ〝ワイルド・スワン（上・中・

下）〃がある。若い女性ユン・チアンが一九七〇年代の中国を、自分の経験を通して赤裸々に描いている。余り知らされなかった中国の様子、政治の動きが内部から見た目で語られていて、こんなに痛烈に自分の国を批判し、外部に公開してよいのだろうかと、驚きながら読んだ。しかし自分の国だから、自分の国を愛しているからこそ、冷静にありのままを書き、自分の考えを熱い思いで語ったのだろうと思う。

99年度に読んだ、司馬遼太郎の〃菜の花の沖〃も大変読みごたえのある作品であった。時代は江戸後期であるが、今その時代を主人公を目の前にして、私自身共に生き、すべての様子を体験しているように思ってしまうようなくわしい記述である。人々の生活のこと、航海のこと、船のこと、地形のこと、ロシアと日本との関係など作者の膨大な資料による研究の上で書き上げられた作品を、一回読み通すだけでは申し訳ない気がする。

読書は、読む人を過去へ、未来へと自在にいざない、少しずつ人の心を豊かにしてくれると言われています。私自身、読書の効果は余り上がっていませんが、お仲間が、一人でも多く増えることを、心から願っています。

書への誘（いざな）い

―― 新講座「書と人の関り」開設の弁 ――

田室西崖

書は人なりと言います。現代のように情報化が進み、もう筆記すること自体が稀有な作業に近づくと、書くことの意味を人の生き方との関りで捉えてみたいと思うようになるのは、書の魅力にとりつかれた私だけなのでしょうか。

現代に希薄になりつつあり、しかも人間に不可欠なものがありはしないか。ともに考えてみたいのです。ぜひごいっしょにどうぞ。

第十七回 文化祭 記録

展示の部

◎前　期　十月二十五日～二十七日

◆短　歌　網干　善教　荒居　智子　大浦小枝子
岡田　越子　柏原　英一　片桐　一夫
木庭　和子　玉置　小代　寺嶋　勃雄
中川都哉子　福井　秀子　藤原　香
松村せつ子

◆筥作りの会　中野　昭三　赤井美津子　秋山　静
新司　輝江　櫟原千鶴子　岡田　越子
北村　源子　幸路　喜代　斎藤久美子
杉山　啓子　堂下美智子　林　美智子
若原　和子

◆パッチワーク　打田　照子　櫟原千鶴子　岡田　越子
奥村　淳子　幸路　喜代　鈴木　幸子
周藤　智子　林　美智子　山内　梅乃
吉川　普子　若原　和子

◆地　酒　写真・日本酒ラベル

◆園　芸　北村　孫衛

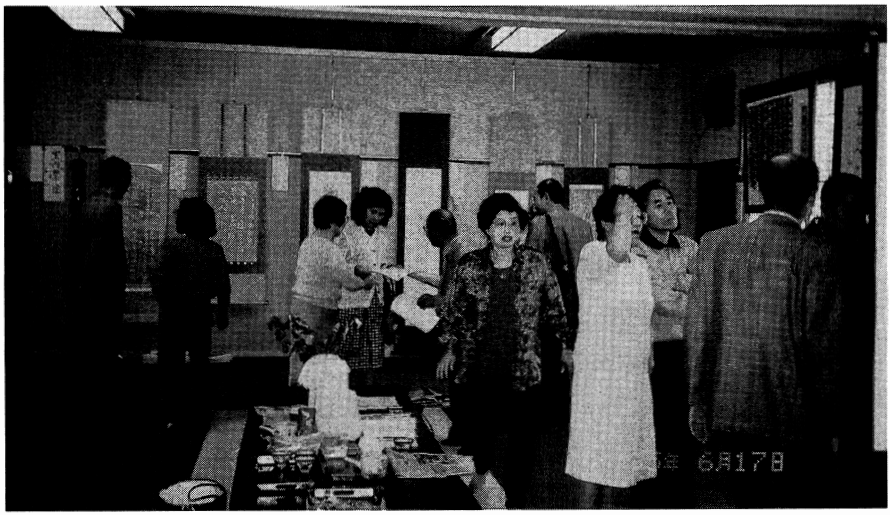
◎中　期　十月二十八日～三十日

◆俳　句　牧野　春駒　牧野　和代　伊藤　柳紅
上田　善次　岡　良子　喜多　まさ
木村　長子　込山　山歩　周藤　智子
多田　文子　辻田しま代　南村　照栄
西田たまみ　西山佐代子　藤井　義治
藤澤　正富　藤澤　陽子　堀池　敏子
森田　陽子　山内　梅乃　和田美代子
◆拓　本　込山　博介　宇野木久代　北本　敏子
鈴木　玲子　宗徳　郁雄　高橋　友示
高橋はる江　竹本　千鶴　南村　勝次
南村　照栄　西島　芳子　西山佐代子
平田　忠子　広田　省吾　堀池　光合
山田　正子　渡辺　亮斗

追悼

筧　裕　白松　春子

◆木目込み　谷口　直子　網干佐和子　石森千代子
◆押　絵　奥村　淳子　北　アサ子　島田　守恵
東山　幹子　鷲塚　順子
◆押　花　広崎　光子　櫟原千鶴子　岡田　越子



河島美代子　木村　絢子　鈴木　幸子
高橋　笑子　西村　好子　西山佐代子
南村　照栄　林　美智子　松村せつ子
若原　和子

◆写　真　赤坐　右一　伊藤　昌一　大倉　喜夫
皆藤　甫　北側　勝　北原　吉雄
志智　英子　鈴木　昭弘　田中　利恵
寺島　勃雄　沼尻　佶　原　昭子

◎後　期　十月三十一日～十一月二日

◆絵　画　梶野　哲　石川　和子　石崎　路子
上田　善次　大野　貞男　岡本　幸子
小西　淑彦　込山　嘉代　沢田　実子
高橋ゆかり　出口真喜子　南村　勝次
西村　道弘　広田　省吾　山崎　明
山田　晴美　吉澤　幸江

遺作

筧　祐　白松　春子

◆銅　板　込山　博介　岡本　幸子　皆藤るみ子
黒田　節子　中村　一郎　西村　通弘
山崎　明

◆軸　装　西島　芳子　大迫くき枝　大橋　芳子
加藤　秀子　西村　從子　平田　忠子
水野　繁三　山本　康彦

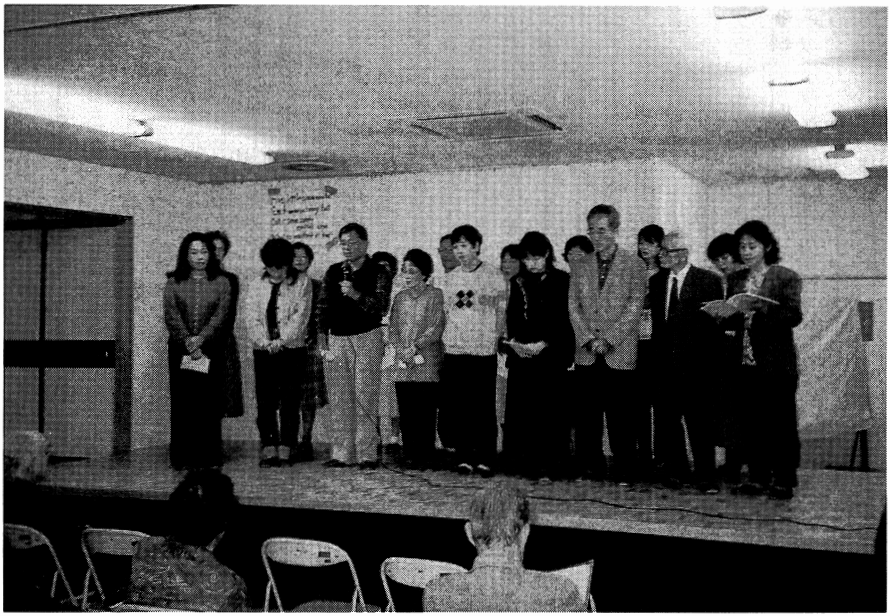
◆木　彫　井ノ山一雄

上演の部

◎十一月三日（祝）　北部出張所会議室

◆箏　曲　菊地雅千絵
「時鳥（ほととぎす）の曲」　楯山　登作曲
本手　田頭雅千香・林　千鶴
替手　菊地雅千絵
「蒼生（そうせい）」第1番　松本　雅夫作曲
林　千鶴
「瀬音（せおと）」　宮城　道雄作曲
箏　菊地雅千絵
十七弦　田頭雅千香

◆詩　吟　詩吟の会
コンダクター　西尾　堤久



「春　望」　杜　甫作

西川たつゑ　山本すま子　北村　幸子

西脇　岑子　山本みどり　油谷　久枝

岩井　静枝　海野　ミツ　津崎美津子

花田　岳娟　越智　岳彩　中川　岳婉

吉田　岳翔

「獄中作」　橋本　庄内作

周藤　吉雄

「峨眉山月」　李　白作

津崎美津子

「望　海」　藤井　竹外作

杉田　英二

「山　行」　杜　牧作

山本みどり

「望郷の詩」　阿倍仲麻呂作

小森　国弘

「白帝城」　李　白作

岩井　静栄

「名槍日本号」　松口月城作

花田　清美　西村　諄輔　周藤　吉雄

杉田　英二　小森　国弘

「春日山懐古」　大槻磐渓作

花田　岳娟

「出郷作」　佐野竹之助作

越智　岳彩

「近江八景」　大江敬香作

宗徳　岳宗　辻田　堤虹　青山　堤源

柏木　堤官　木村　堤泰　影山　知子

「新相馬」　渡辺岳吟作

吉本　堤瑞

◆ギター演奏　中村　昭三

「タンゴ　ラ・クンパルシーター」

「タンゴ　ショニロ」「タンゴ」

「郷愁」「ロシア民謡」

「ジャーニーギター」「スペインの花」

◆英語講座　鎌田　時栄

英語朗唱

「大きな木　A　Giving　Tree」

歌　「Que　sera　sera!」

みんなで歌おう

「Five　Little　Snow　Men」

出演者　ういんh

麻生　道子　犬伏　房子　加藤　啓子

鎌田　時栄　木内　尚文（たかし）　咲間千恵子

塩出喜久恵　島田　仁　鈴木　和子

鈴木　時子　藤戸　洋子　堀田　幸子

安田　浄　山本みどり　山田　洋子

◆舞踊　手踊り同好会

「黒田節」

岡田　利一

「まつの木小唄」

毛利　公子　小森美恵子　島川恵美子

山内　梅乃

「巽の左褄」

久門　冨美

「磯原節」

毛利　公子

「ボーリングたよ人生は」

毛利　公子　小森美恵子　島川恵美子

山内　梅乃

2000（平成12）年度

第18回 平城ニュータウン文化協会

日　　時　　2000年5月21日（日）
受付　PM 1：00
開会　PM 1：30
場　　所　　北部出張所会議室

Ⅰ　開会の辞
Ⅱ　会長挨拶
Ⅲ　来賓祝辞
Ⅳ　議長選出
Ⅴ　議　　事
(1)　1999年度事業報告
(2)　1999年度会計報告・監査報告
(3)　2000年度事業計画
(4)　2000年度予算
(5)　その他
Ⅵ　閉会の辞

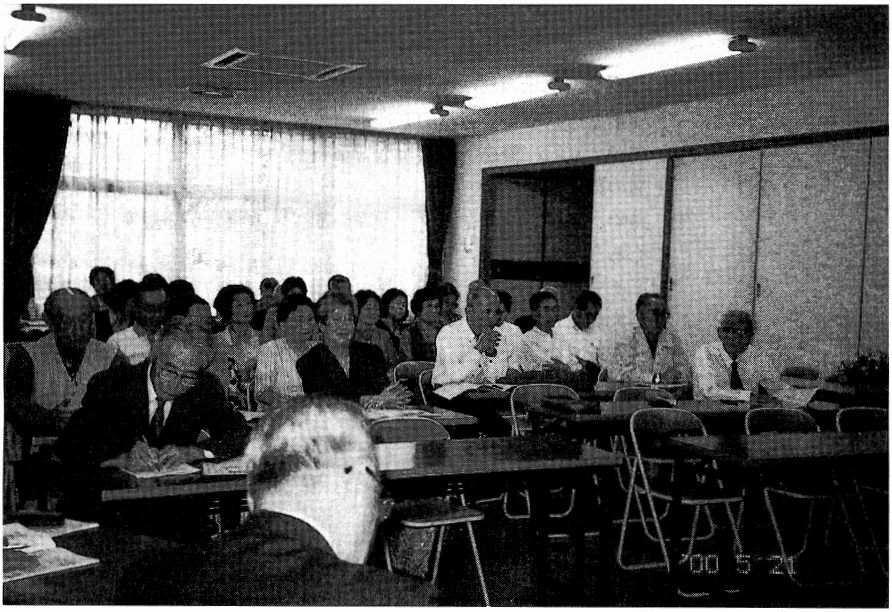
第18回総会　**記念講演**　　午後 2：30から

『飛鳥新出土の亀形石について』

講師　関西大学名誉教授
網　干　善　教　氏

懇親会　　午後 4：00から

2000 年度総会
'00 5 21


'00 5 21

１９９９年度事業報告

1999年４月１日　ニュース１号発行
５月15日　協会報発行　全戸配布
23日　第17回（1999年度）総会
記念講演『邪馬台国とは』　網干　善教先生
６月１日　ニュース２号発行
８月１日　ニュース３号発行
21日　常任理事会
９月４日　平城西公民館審議会
18日　文化祭展示部打ち合わせ会
24日　観月の会
26日　右京小学校運動会出席
10月１日　ニュース４号発行
３日　右京幼稚園運動会出席
15日　協会報発行　全戸配布
26日　「層富」発行
10月25日～11月２日　文化祭開催
25日～27日　前期展示の部　短歌、パッチワーク、筥作りの会
地酒を味わう会、園芸
28日～30日　中期展示の部　俳句、拓本、写真、押し花
木目込み人形・押し絵
31日～11月２日　後期展示の部　絵画、銅版レリーフ、表装
11月３日　文化祭記念講演　「最近の奈良市の埋蔵文化財の調査」
講師　立石　堅志（奈良市教育委員会）
３日　上演の部
詩吟、舞踊、箏曲、ギター独奏、朗読・歌唱（英語講座）
３日　ごくろうさん会
５日　セミナー　講師　柴田　晃良
７日　囲碁大会
28日　新春を祝う会実行委員会出席（右京自治連合会）
2000年１月１日　ニュース５号発行
５日　新春を祝う会実行委員会出席（右京自治連合会）
９日　「ＮＴ新春を祝う会」参加
29日　奈良市生涯学習センター見学（右京自治連合会）
２月１日　ニュース６号発行
３月７日　セミナー　講師　田室　西崖
20日　常任理事会

1999年（平成11年）度決算報告

平成11年４月１日～平成12年３月31日

【収入の部】　（単位、円）

項　目	予　算	実　績	増　減	備　考
前年度繰越金	115,424	115,424	0	
会　費	540,000	621,000	81,000	@1,500×414人
援助費	100,000	70,000	△ 30,000	各自治連合会、自治会
寄付金	10,000	13,487	3,487	講師お礼戻り 文化祭ご苦労さん会余剰金
雑収入	576	177	△ 399	銀行利息　他
合　計	766,000	820,088	54,088	

【支出の部】

項　目	予　算	実　績	増　減	備　考
事業費	70,000	50,995	△ 19,005	文化祭、セミナー
助成金	81,000	84,000	3,000	講座、同好会　3,000×28
会議費	5,000	1,190	△ 3,810	会議、資料、他
広報費	460,000	407,055	△ 52,945	会誌、会報、ニュース
事務費	25,000	22,873	△ 2,127	事務用品、他
印刷、消耗費	80,000	78,750	△ 1,250	コピー機消耗品
通信費	5,000	1,890	△ 3,110	郵送料
渉外費	5,000	6,000	1,000	協賛費、祝金等
雑費	10,000	0	△ 10,000	項目にない出費
予備費	10,000	0	△ 10,000	
積立金	15,000	15,000	0	特別会計繰入れ
小計	766,000	667,753	△ 98,247	
次期繰越金		152,335		
合　計	766,000	820,088		

特別会計　南都銀行スーパー定期12年３月31(日)現在　¥85,000
備品　コピー機一台　LEODRY2540
1999年度の会計帳簿・証票類他関係書類等を精査した結果適正であると認めます。

監事　東　叡　㊞
西村美佐子　㊞

２０００年度事業計画

はじめに

当「協会」は、地域での日常的な文化活動を通して、地域コミュニティー・住民の親睦と和を実現していくために、当時の自治会・連合会の「街づくり」の方針のなかで結成推進されてきたものです。

この設立趣旨にそって、地域住民の多くの方の、参画を期するとともに、会員の研究創作発表、相互の交流などの場としつつ、地域文化の発展に、寄与することを基本としていきます。

また地域四自治連合会をはじめ、スポーツ協会、教育懇談会、地区社会福祉協議会などの各団体の活動とも連携して、ひきつづき「街づくり」に貢献していきます。

おもな計画

1　講演会の開催　　総会記念講演
　　文化祭記念講演

2　セミナーの開催

3　会誌『層富』の発行

4　会報の発行（全戸配布）　文化協会案内号
　　文化祭案内号

5　ニュースの発行（隔月発行予定）

6　大和路見学会　　春１回
　　秋１回

7　文化祭の開催

8　観月の夕べの開催

9　年間を通じて趣味の講座開催

10　その他

会の発展を期しての工夫など会員各位の、提案、役員会決定などにもとづき適宜事業を推進したい。

2000年（平成12年）度予算

【収入の部】　（単位、円）

項　目	金　額	備　考
前年度繰越金	152,335	
会　費	585,000	@1,500×390人
後援費	70,000	各自治連合会、自治会より
寄付金	10,000	
雑収入	665	銀行利息他
合　計	818,000	

【支出の部】

項　目	金　額	備　考
事業費	80,000	文化祭、セミナー他
助成金	87,000	講座、同好会の助成　@3,000×29
会議費	10,000	会議、資料、他
広報費	430,000	会誌、会報、ニュース他
事務費	30,000	事務用品
印刷、消耗品費	80,000	印刷機器消耗品、コピー
通信費	5,000	郵送料、電話代
渉外費	10,000	協賛費等
雑費	10,000	各項目に該当しない必要経費
予備費	6,000	
積立費	70,000	コピー機積立費
合　計	818,000	

講座・同好会一覧

	定期講座・同好会	担当者	☎71局	曜日・時間	予定会場
1	歴史教養講座	網干善教	6510	第2火曜日（10時～12時）	北部出張所会議室
2	古代史講座	鬼頭清明 問合せ　西島芳子	72-0335	概ね第4火曜日（14時～16時）	北部出張所会議室
3	囲碁同好会	野田清麿	5465	毎日曜日（13時～18時）	平城西公民館和室
4	木目込人形・押絵同好会	谷口直子 問合せ　石森千代子	3183	第1・第3水曜日（10時～14時）	北部出張所会議室
5	読書会	問合せ　山内梅乃	1654	第4金曜日（10時～12時）	北部出張所会議室
6	中国講座	松村如洋（ユキ・ヒロ）	9605	毎木曜日（10時～11時半）	北部出張所会議室
7	詩吟の会	吉本音市・西尾弘子 問合せ　花田清美	5036 2787	第1・2・3水曜日（10時～12時） （13時～15時）	北部出張所会議室
8	地酒を味わう会	松本敏夫 問合せ　鈴木昭弘	1690	第2土曜日（18時半～）	会場不定
9	園芸の会	北村孫衛	0823	第4木曜日（13時～16時）	右京4－7－5
10	拓本を楽しむ会	込山博介	5058	不定期　その都度会員には連絡	会場不定
11	絵画の会	梶野哲 問合せ　吉沢幸江	3295 1296	第1・3火曜日（10時～12時） 第2火曜日（13時半～17時）	北部出張所会議室
12	俳句入門 （平城山句会）	牧野和代 問合せ　西山佐代子	1777 4950	第3木曜日（13時～16時）	平城西公民館
13	短歌を楽しむ会	網干善教 問合せ　木庭和子	6510 3494	第3火曜日（13時半～16時）	北部出張所会議室
14	フランス語講座	根来良子 問合せ　木庭和子	8253 3494	毎月曜日（10時～11時半）	北部出張所会議室
15	山歩きの会	西幹友雄	6102	第2土曜日（雨天中止の場合は第3土曜）	野外
16	英語講座	鎌田時栄	3150	第1・3土曜日（9時半～12時）	平城東公民館
17	万葉講座	松岡禮一	2964	第1月曜日（13時半～15時半）	北部出張所会議室
18	……歩く会	広田省吾	0207	奇数月第4金曜偶数月第4日曜日	野外
19	筥作りの会	中野昭三 問合せ　幸路喜代	72-0363	第2・4月曜日（10～16時）	北部出張所会議室
20	野草をしらべる会	前川良雄 問合せ　柏木一枝	0682 3202	春・夏・秋年に3回程度	野外
21	パッチワーク研究会	打田照子	2879	第2・4金曜日（13時～16時）	北部出張所会議室
22	手踊り同好会	毛利公子	1989	第1・3金曜日（10時～12時）	北部出張所会議室
23	写真同好会	赤坐右一	0111	概ね月2回金曜日・ニュースで通報	野外
24	銅板レリーフ同好会	丸福修 問合せ　山崎明	43-3326	第1・3金曜日（13時半～16時）	平城西公民館
25	押し花同好会	廣崎光子	0774-73-0702	第1木曜日（10時～15時）	北部出張所会議室
26	料理を楽しむ会	松村せつ子	9605	第1木曜日（10時～12時）	平城東公民館
27	表装の会	西島芳子	72-0335	第2・4木曜日（10時～17時）	北部出張所会議室
28	先史学講座	泉拓良 問合せ　山内梅乃	1654	第3月曜日（15時～16時半）	北部出張所会議室
29	書道講座	田室西崖	7035	第3月曜日（13時～15時）	北部出張所会議室

会　則

第一章　総　則

第一条　この協会は、平城ニュータウン文化協会という。

第二条　事務局は、平城西公民館に置く。

第二章　目的及び事業

第三条　会員の研究・創作発表、知識の交換並びに会員相互間及び他の文化団体との連絡提携の場となり、総合文化に関する進歩普及をはかり、地域文化の発展に寄与することを目的とする。

第四条　前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1　講演会・研修会・展覧会・発表会・文化講座等の開催。

2　関連文化団体との連携及び協力。

3　研究の奨励及び研究業績の表彰。

4　会誌の発行。

5　その他目的を達成するために必要な事業。

第三章　会　員

第五条　平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、協会の目的に賛同する者とする。会員の種別は次のとおりとする。

1　正会員　年間会費一、五〇〇円
　　但し、高校生五〇〇円

2　賛助会員　この協会の趣旨に賛同する者で年間会費五、〇〇〇円以上納める個人又は団体とする。

二、会員の更新手続きは不用とするが会費は総会後三ケ月以内に納入のこと。但し、二年間会費納入なき場合は退会と見做す。

第四章　役　員

第六条　協会にはつぎの役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、事務局長一名、事務局次長一名、会計一名、

理事若干名、監事二名。

第七条　理事は、正会員中より選出する。

二、会長、副会長、常任理事は理事の互選で定め総会の承認を得る。

三、事務局長、事務局次長、会計は理事中より会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

四、監事は会員中より二名選出する。

第八条　会長は協会を代表する。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故ある時は代行する。

三、理事は理事会を組織し、協会に関する事項を審議し執行する。

四、常任理事は理事会の決定に基づき業務遂行に当たるとともに、総会で決議した事項を執行する。

五、事務局長は会務の遂行に関する理事会、常任理事会等の決議に基づき全般の事務連絡、処理に当たる。

六、事務局次長は事務局長を補佐する。

七、会計は会計事務を処理する。

八、監事は会計帳簿を監査し、通常総会において報告する。

第九条　顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二、顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第十条　役員の任期は二年とし、再任は妨げない。

二、補欠より選出された役員の任期は、前任者の残任期間とする。

三、役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

第五章　会　議

第十一条　理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならない。

二、理事会の議長は、会長又は会長の指名する者とする。

三、理事会は理事の二分の一以上出席しな

ければ議事を開き議決することができない。

四、理事会の議事は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決す。

第十二条　常任理事は、会長、副会長、常任理事、事務局長、会計によって構成し、必要に応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第十三条　通常総会は毎年一回会長が招集する。

二、臨時総会は、理事会が必要と認めたとき会長が招集する。

三、総会の議長は総会出席者の中から指名する。

四、総会の議事は、出席者の過半数をもって決し可否同数のときは議長が決する。

第十四条　次の事項は通常総会に提出して、その承認を受けなければならない。

1　事業報告及び収支決算

2　会計監査報告

3　事業計画及び収支予算

4　その他理事会において必要と認めた事項。

第六章　会　計

第十五条　経費は会費並びに補助金、その他の収入による。

第十六条　会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第七章　会則の変更

第十七条　この会則は、総会の議決を得なければ変更することができない。

第八章　補　則

第十八条　この会則施行についての細則は、理事会の議決を得て別に定める。

第十九条　この会則は昭和五十八年二月二十七日から適用する。

二〇〇〇年度 役員名簿

会長　網干善教
副会長　松岡禮一
　　光岡祐彦
事務局長　山内梅乃
会計　大浦小枝子
監事　西村美佐子
　　東叡
参与　川口勇
　　谷口直子
常任理事　赤坐右一
　　石森千代子
　　上中敏央
　　打田照子
　　大迫くき枝
　　岡田越子
　　梶野哲
　　鎌田時榮
　　北村孫衛
　　木庭和子
　　込山博介
　　鈴木幸子
　　田中幸夫
　　玉置小代
　　田室西崖
　　中野昭三
　　西島芳子
　　西幹友雄
　　西村通弘
　　西山佐代子
　　花田清美
　　廣田省吾
　　廣崎光子
　　前川良雄
　　松村如洋
　　松村せつ子
　　毛利公子
　　渡邊馨

理事　大井政子
　　大工美智子
　　筧ゆり子
　　河村美智子
　　喜多正惠
　　北川尚子
　　澤田實子
　　柴田晃良
　　南村照榮
　　濱口光良
　　山下良吉
　　山田綾子
　　吉村惣五郎

(16) 佐保山第１号墳　奈良市佐保台１丁目

直径約１２ｍの円墳。木棺直葬。鉄刀、鉄鏃群、埴輪（家、円筒）出土。

築造時期５世紀中頃。消滅。

(17) 佐保山第２号墳　奈良市佐保台１丁目

直径約１０ｍの円墳。割竹形木棺。須恵器、土師器、鉄剣、鉄鏃、鉄鋤先出土。

築造時期５世紀後半頃。消滅。

(18) 佐保山遺跡群　奈良市佐保台１丁目

奈良時代の火葬墓群。土壙、土師器、須恵器、骨蔵器、二彩陶片（奈良二彩多嘴壺）出土。消滅。

(19) 遺物散布地　奈良市佐保台３丁目　奈良時代。

【20】音如ヶ谷瓦窯　木津町相楽台７丁目　音如ヶ谷公園内

奈良時代のロストル式平窯４基（Ⅰ号～Ⅳ号窯）。小規模の建物跡５棟。

Ⅰ号窯＝東斜面、現存長３．９ｍ、焼成室の奥行１．８５ｍ、幅２．１ｍ、隔壁の厚さ０．４ｍ、燃焼室の奥行１．６５ｍ、最大幅１．９ｍ、焚口の幅０．７ｍ。

Ⅱ号窯＝東斜面、現存長３．９ｍ、焼成室の奥行１．６ｍ、幅２．４ｍ、隔壁の厚さ０．４ｍ、燃焼室の奥行１．９ｍ、最大幅１．７ｍ。

Ⅲ号窯は焼成室と燃焼室の一部を、Ⅳ号窯は燃焼室のみ検出。

軒平瓦、軒丸瓦、鬼瓦、文字瓦出土。現在　覆屋の中に、Ⅰ号、Ⅱ号窯が復原されている。

① 音乗谷古墳

丘陵の先端部に位置する径２５ｍ、高さ４．５ｍの古墳。古墳の存在する丘陵の東側斜面裾部（６０ｍ東南方）に音如ヶ谷瓦窯がある。墳丘南側に掘割、石室長さ４ｍ、幅２ｍ、排水溝を検出した。須恵器、刀、剣、刀子、鏃、雲珠、管玉、埴輪（円・翳蓋・盾・靫・人物・猪・馬）出土。築造時期６世紀前半。消滅。

② 相楽山銅鐸出土地　木津町相楽台８丁目

昭和５７年（１９８２）６月１２日午後３時３０分頃、ニュータウン造成工事中に偶然、銅鐸が発見された。銅鐸＝中段階（偏平鈕２式）・６区袈裟襷文。略測値＝総高４０．５㎝、すそ幅２６．９㎝。京都府立山城郷土資料館蔵。出土地点に標柱をたてる計画がある。

③ 大畠遺跡

相楽山銅鐸出土地から北東約２００ｍ、丘陵裾から平地に広がる、この銅鐸を使ってまつりを行ったムラと推定されている弥生時代の遺跡。弥生時代中期の竪穴住居３棟方形周溝墓１基が発見された。

資料①

【奈良市文化財分布図】を一部分拡大して、

☆番号【1】～【20】、①～③、アルファベット文字Ａ～Ｃを付けた。

☆番号①～③は推定地。

平成１１年８月作成　柴田

【1】 押熊瓦窯

【2】 石のカラト古墳

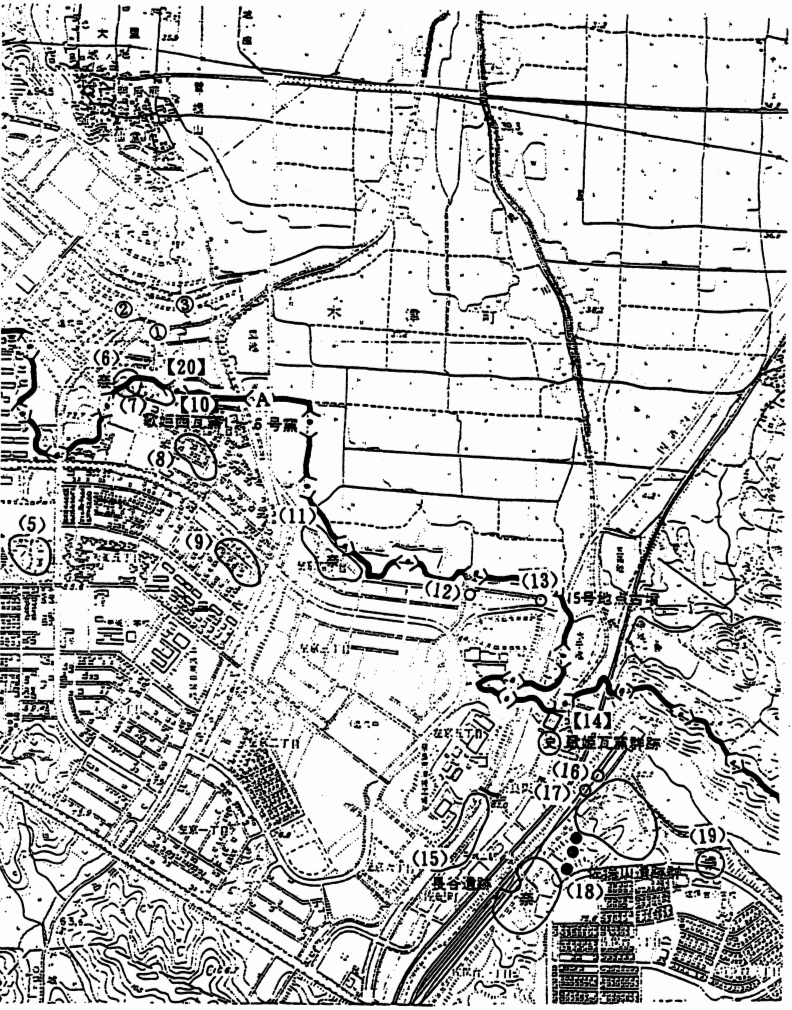
(3) 山陵古墳

(4) 奈良山第５３号窯

(5) 遺物散布地

(6) 遺物散布地

(7) 須恵器窯跡



(8) 遺物散布地
(9) 遺物散布地
【10】 歌姫西瓦窯
(11) 遺物散布地
(12) 奈良山第１３号地点古墳
(13) 奈良山第１５号地点古墳
【14】 歌姫瓦窯群跡（国史跡）
(15) 長谷遺跡
(16) 佐保山第１号墳
(17) 佐保山第２号墳
(18) 佐保山遺跡群
(19) 遺物散布地
【20】 音如ヶ谷瓦窯
① 音乗谷古墳
② 相楽山銅鐸出土地
③ 大畠遺跡
A 奈良県・京都府境界標識
B - 超昇寺橋
C 常福寺橋

資料②

【1】押熊瓦窯（１号～６号窯）　奈良市神功６丁目緑地公園内

平窯。奈良時代後半。１号窯＝西方に焚口をもつ東西主軸の平窯。全長４．４ｍ、幅１．２ｍ、深さ０．８ｍ。（２号～６号窯。本来の規模不明）軒丸瓦、軒平瓦、面戸瓦、鬼瓦、塼他出土。

【2】石のカラト古墳（京都府・カザハヒ古墳）奈良市神功１丁目５／木津町兜台２丁目

終末期古墳。上円下方墳。１辺約１４ｍ。横口式石槨。木心乾漆棺？、金・銀製玉、銀荘唐様太刀の鞘の責金具、金箔片、漆断片、須恵器、土師器他出土。

(3) 山陵古墳　奈良市右京２丁目　規模他不明。消滅。

(4) 奈良山第５３号窯（１号～３号窯）＝山陵瓦窯　奈良市右京２丁目

瓦窯跡。１・３号窯＝登窯　２号窯＝平窯。　屋根瓦、鬼瓦出土。奈良時代後半。消滅。

(5) 遺物散布地　奈良市朱雀２丁目　須恵器出土。

(6) 遺物散布地　奈良市朱雀４丁目　奈良時代。

(7) 須恵器窯跡　奈良市朱雀４丁目　登窯？３基。須恵器、硯片出土。奈良時代後期。消滅。

(8) 遺物散布地　奈良市朱雀４丁目

(9) 遺物散布地　奈良市朱雀５丁目

【10】歌姫西瓦窯（１号～６号窯）　奈良市朱雀４丁目　歌姫史跡公園内

瓦窯跡。平窯。全長は、１号窯＝９．５ｍ　２・３号窯＝４ｍ　４・５号窯＝５ｍ　６号窯＝規模不明。屋根瓦、文字瓦（４号窯）宝相華文軒丸瓦（６号窯）出土。奈良時代後半。

(11) 遺物散布地　奈良市左京４丁目　須恵器出土。奈良時代。

(12) 奈良山第１３号地点古墳　奈良市左京５丁目

土壙、溝状遺構、円筒埴輪列。規模・形不明。古墳時代中期。消滅。

(13) 奈良山第１５号地点古墳　奈良市左京５丁目

径１０ｍ前後の円墳と推定。円筒埴輪片、鉄斧、須恵器（甕）出土。築造年代５世紀末頃。消滅。

【14】歌姫瓦窯群跡（国史跡）　奈良市歌姫町

昭和２８年（１９５３）の発掘調査で、小さい谷地形の東面傾斜地に占地する、南北に連なる６基の平窯が確認された。南端の１基はよく遺構が残っていた。この窯は全長４．２ｍの平窯で、燃焼室と焼成室の境を遮断し、そこに７口の炎を通す口と、炎道を設けたいわゆるロストル式の構造であった。奈良時代末期。現状は叢林。

(15) 長谷遺跡　奈良市左京６丁目

古墳時代中期（５世紀後半）の集落跡。竪穴住居址、土壙、土師器、須恵器出土。